

# 昭和集団羞辱史

物売編(昼) 淫毛の御守  
寝室必需品



濠門長恭

## 巻頭言

「もはや戦後ではない」と経済白書が宣言した昭和三十一年。所得倍増計画が発表された昭和三十五年。時代は高度経済成長に突入していた。

進学率が半数に達していなかった当時、停滞する一次産業地域の新卒者の多くは、急成長を続ける工業と商業へと、就職していった。地方から大都市へ新卒者を運ぶ『集団就職列車』が仕立てられたほどだった。

しかし。華やかで豊かな生活への憧れと希望とを胸に巣立つ若者たちばかりではなかった。意に染まぬものの、さまざまなき事情で、都会の汚濁に身を投げ込まざるを得なかった少年少女もいた。

このシリーズでは、高度経済成長の影で泣いた——主として少女たちの足跡を追ってみ

たいと思う。

なお、本シリーズでは、昭和三十年代に普通に使われていた名称を敢えて使い、現代風には書き換えない。ソープランド（トルコ風呂）が出現するのは昭和六十年になってからであるし、昭和五十年代後半までニューハーフ（オカマ）という言葉は知られていなかった。ビジネスガールは娼売女の意味を持たなかった。

時代劇の中で、経済とか軍事力といった言葉に違和感を覚えるのと同じ理由で、筆者は右の方針を採るものである。

本シリーズの設定は、作者の少年時代の記憶を土台にして、あるいは時間軸をずらし、またはネットで得た知識に基づいて想像や虚構を大幅に交えたものであるが、登場する人物・年齢・団体・地名などはすべてフィクションである。また特定の思想などを賛美もし

くは誹謗するものでもない。本文中に述べられる作者の見解についても、論説などではないことをお断わりしておく。

本編について

現代ではネット経由の通販で、ほとんど世界中のあらゆる品物を容易に購入できるし、ネットオークションでは相当に怪しげな品物でさえも入手できなくはない。

しかし、昭和の中頃まではテレビと電話による通販さえもなかった。詐欺紛いのカタログによる通信販売が（成人雑誌などで）横行していたし、押し売りも日常茶飯であった。

また、『世間の目』は厳しく、若い娘が深夜にコンドームを買うなど、およそ考えられる光景ではなかったのである。

そういった背景を踏まえて本編をお読みいただきたい。

# 目次

卷頭言	1
淫毛の御守	6
踊り娘と女工	8
勇気を出して	15
ひとりには危険	44
女楽器の調べ	61
厳そかな淫事	73
女たちの来訪	90
見せしめの磔	99
堅気との訣別	119
寢室必需品	133

模擬性交  
性技講習  
実演販売  
試着販売  
販路拡大  
三角関係  
商品開発  
緊縛体験  
悦虐開眼  
後書き

1 3 5  
1 6 4  
1 7 9  
1 9 1  
2 1 0  
2 2 0  
2 2 3  
2 2 3  
2 3 0  
2 4 5  
2 5 7

## 淫毛の御守

処女の淫毛がギャンブルの御守になるとは、古来からの伝承である。戦時中には弾丸避け（処女だから、まだ金玉に当たっていない）の御守ともされた。とはいえ、この御守の靈験についての実証体験談は、筆者は寡聞にして知らない。所詮は、男の処女性への憧れが生んだ罪のない神話ではあろう。

そもそも、絶対に処女であるとは医者でさえも証明できない。通俗的に思いつく証明方法に頼れば（出血も絶対の証拠にはならないのだが、それはさておき）証明した瞬間に処女ではなくなってしまう。パイパンになるまで淫毛を抜いて保存しておいてから証明に及

んだとしても、その証明を公開すれば、それはそれで罪に問われてしまう。

そういった矛盾を克服して処女の淫毛を安定した商品とするには、本編で述べるような方法しかない、筆者は思う。

お断りしておくが、あくまでもフィクションである。しかし、容易に思いつく商法であるから、あるいは過去（ないし現在）に、实例が無いとも断言できない。



## 踊り娘と女工

二人の友達と一緒に同じ工場へ就職して一年。神坂美子は、幻滅と退屈の真っ最中だった。都会に憧れていたのに、工場は故郷とあまり変わらない田舎にある。まわりにあるのは、工場と社宅と寮と田圃と田圃と田圃。映画館もないし、百貨店もないし、お洒落な公園も喫茶店もない。当然ながら、素敵な出会いのチャンスもなかった。まわりにいる異性は、工場の人たちばかり。あと何年かしたら、先輩や上司とくっついて社宅へ引っ越す子も何人か出るのだろうけれど、そんなのは真っ平だった。

せめて休日は都会へ出て遊びたいのに、徒歩十五分の最寄り駅には各駅停車しか止まらない。街へ出るには、途中で快速に乗り換えて四十分。美子の感覚では、ちよつとした小

旅行だ。小旅行にしては、持って行くお小遣いが侘びしい限りだし。などとぼやきながらも、美子は今日も同窓の三人組で都会へ遠征していた。

なけなしのお小遣いをはたいて封切り映画を観るのと、時間つぶしの百貨店探訪。

今日は、映画の内容に感化されてちよつと冒険を試みたい気分になって、いかがわしい場所まで足を伸ばしてみた。といっても、いかがわしくなるのは夜になってから。昼間は、工場の物置よりもぺらぺらな小屋に、昼行灯みたいな看板が白っ茶化けてもたれかかっているだけの、裏寂れた場所だった。まばらに道行く人たちもだらしない服装で、まるで活気がない。たまに、バービー人形みたいに綺麗なお姐さんを見掛けるが、けばけばしくて肌も露わな身なり。水商売と一目で分かった。

もう引き返そうと思いつながら、怖じ気づいたと思われたくなくて誰も言い出せなくて、しばらく歩いていると、やたら大きな建物に出くわした。

美子の第一印象は、三番館だった。一等地にある大きくて綺麗な封切館と、一年以内の

映画を上映している小洒落た二番館。そして、古い映画を安い料金で観せてくれる場末の三番館。街中ではみすばらしい三番館だが、この場所にあつては威風堂々の感があつた。映画館にふさわしい、大判の美麗なポスターも（やたらベタベタしているくらいがあつたが）壁に張り出されている。

映画館でなくて芝居小屋かもしれない。美子がそう思ったのは、ポスターに描かれているのが美女ばかりだったからだ。でも、違和感が残つた。どんな内容なんだろう。まるきり統一性がなかつた。

臍長けた和服の姉妹（美蝶・美絵と書いてあるから、そうなのだろう）と、ブラウスの裾を胸元高く結んでお腹が丸出しのバタ臭い女性。そして、太腿も肩も剥き出しのバレエ衣装を着た若い娘。映画のポスターらしく美化されているが、美子と同年齢くらいと分かるあどけなさが漂っている。

「やだ。この娘もストリップなの？！」

和枝のすつとんきような声で、違和感がストンと腑に落ちた。美子も、ストリップくらは知っている。踊りながら衣装を脱いでいって、裸を男の人に見せるショーだ。日本舞踊もダンスもバレエもあるのだろう。

でも……裸を見られて羞ずかしくないんだろうか。きっと、それに見合うお金がもらえるんだろう。あたしのお給料の二倍かな。もっとかな。

美子の給料は額面で一万五千元。新卒女子社員としては決して悪くない。新聞などで取り沙汰される、大手企業の平均値そのものだ。けれど、寮費や税金を天引きされて、手取りはかつかつ一万円。半強制的に社内預金もさせられているし、親元への仕送りも雀の涙だけ——あれやこれやで、月に一度の封切映画館がやつとという現状になってしまう。

美子は単純に、ポスターに描かれている少女を羨ましく思った。裸を見られるのは羞ずかしいかもしれないけれど、身体の美しさに自信があるから出来るのだろうと思う。それにバレエ。自分にはどちらもない。美子がストリップ嬢に抱いた思いは、女優や少女歌手

へのそれと似ていなくもなかった。もつとも、それは——『特出し』とか『御開帳』を知らないが故の憧憬ではあつただらうけれど。

「へええ、処女バレリーナか。ほんとかねえ」

横合いから声がして、美子たちはあわててポスターから離れた。けれど、男二人連れの声高な話が気になって（なにしろ、白鳥麗佳というバレリーナは、自分たちと同じ歳くらいなのだ）立ち聞きをしてしまう。

「処女てのは本物らしいぜ。松田のやつ、かぶりつきの御開帳で、たしかに処女膜を見たつて、吹いてやがった」

「で、俺っちを友釣りに引き出したつてか。まあ、今日は開催がないから、いいけどよ」

「おまえのためだよ。処女のお毛々てのは、ギャンブル必勝の御守だろ」

「へえ、この娘が売ってくれるのか？」

「絶対に駄目つて、後ろについてる怖いお兄哥さんが目を光らせてるそうだ」

「なんだよ、それ」

「だけど、ステージに落ちてるのを拾う分には御構い無しらしい。だから、この娘の御開帳の後は、そのままかぶりつきにしがみついて鶉の目鷹の目。なんでも、貴重な一本を頂戴したてんで、チップに千円札を張り込んだオッサンもいたって話だ」

「へええ。千円ねえ。そりやまあ、真正銘の処女なら俺っちだって張り込むぜ。けど、ステージに落ちてる毛なんて、誰のか分かったもんじゃねえや」

袖を引っ張られて、美子は我に還った。

「行きましようよ。ギャンブルだのお毛々だの、恐いし気持ち悪い」

耳元にささやかれ再度袖を引っ張られて、美子は踵を返した。

「ああいうヤクザな人たちに目をつけられたら、どんな目に遭わされるか分かったものじゃないわ」

最上梓紗が、軽蔑しきった口調で（二人の男たちとはずいぶん距離が開いたのに）ささ

やいた。

「美子ちゃんは好奇心が強すぎるから、危いわよ」

熊野佳子はふつうの声で梓紗に同調した。

危ないと言われれば、たしかにそうなんだろうかと、美子自身も同意せざるを得ない。もしもふたりがいなかったら、千円なら、自分の淫毛を売ってもいいかなと思っていたのだから。

三人は表通りへ戻って、喫茶店で冒険の祝杯をあげて。梓紗は本屋で文庫本の新刊を漁りたいと言い、佳子はいつものように百貨店で目の保養をしたいと主張するので。美子は敢えてどちらにも味方しないで、今日は疲れたので公園で日向ぼっこしたいと、二人とも却下するだろう提案をして——三人別行動に決まった。

まだ、美子は決心していたわけではない。それでも、さっきの二人の男たちの話が気になっっていて、いかがわしい場所にある東洋娯楽劇場へと引き返したのだった。

## 勇気を出して

入口の横にあるチケット売場で上演時刻を確かめる。あと二十分ほどで終わると分かったので、劇場からすこし離れて様子をうかがうことにした。

所在なく突っ立っていると、通りかかった人たちに無遠慮に眺められた。春向けのカーデガンを羽織って、ふんわりした膝丈のスカートを穿いた美子は、ごく平凡な若い娘にしか見えない。しかし、その素人臭さと若さとは、こういう場所ではたとえ昼間でも場違いなもの——という自覚が美子にはなかった。ただ、居心地の悪さだけは感じていた。

(いったい、あたしは何がしたいんだろう?)

美子は自分に訊ねてみる。二人の男の人の話を聞いていて、もし買ってくれるなら自分



の毛を売ってもいいと思ったのは事実だが……自分から「買ってください」なんて、言い出せない。どころか——向こうから近寄ってきたら、逃げ出してしまうんじゃないだろうか。そうは思っても、この場から立ち去る踏ん切りもつかないのだった。

——劇場から、ぱらぱらと人が出て来た。三番館と同じだと、美子は思った。三番館は入れ替えがない。居座って二度観る客もいるし、途中から入場して、観れなかったところまでを後から観る人もいる。観客が一斉に出て来たりはしない。

まばらな人込みの中に、目当ての二人は見つからなかった。その代わり、数人が立ち止まって何か揉めているらしいのが目についた。喧嘩の雰囲気ではない。「麗佳の毛」という言葉も聞こえてきた。ので、怖さよりも好奇心が募って、劇場の端まで近寄って路地に身をひそめて聞き耳を立てた。

「やなこった。千円が万円でも、金輪際売らねえよ」

「そこをなんとか。こないだの特別競輪で2枠総流しのつもりが、ついニイゴオだけ抜か

して、万券を取り逃がしたんですよ。御守さえあつたら、あんなポカはしようたつて出来なかつたはずなんだ」

「しつこいね。売らないつたら、売らないんだよ」

話を持ちかけられていた若い男が、取りすがっている中年男を突き飛ばして、二人の間と共に立ち去つた。突き飛ばされた男はたたらを踏んで体勢を立て直し、しばらく三人連れの背中を悔しそうに見送つていたが、諦めるしかない。美子が隠れているほうへ向かつて歩き始めた。

美子の背中をいくつもの手が押した。この人は、なんと一万円を払つても処女の毛を欲しがっている。最初の二人よりも今の三人よりも紳士的だ。一人きりだから、変なことをされそうになつても振り払えるだろう。

男が目の前を通り過ぎようとする瞬間に、美子は路地から半歩だけ姿を現わして声を掛けた。

「小父さん……」

男が美子を見て足を止めた。

「真つ昼間から客引きかね」

口調は質問ではなく断定だった。

どこかの店の前ではなく路地からとなると、もったもいかわしい商売、いや娼売と思われても仕方ない——とは、美子には思いもよらない。だからこそ、単刀直入に切り出せた。

「あたし、処女です。下の毛を買ってくださいますかしも」

ほう——と、男はあらためて、品定めをするような目で美子を見た。

「今の話を聞いていたのか。たしかに君が処女なら、買ってあげてもいいが……証拠はあるのか？」

男の言葉には揶揄の響きがあったが、生まれて初めての決心に頭がいっぱい

になっている美子には分からなかった。

淫毛を売るといふそのことしか頭になかった美子は、男の問に答えられなかった。

戸惑っている美子を見て、男は唇の端で嗤った。相手は世間知らずの無鉄砲な小娘に過ぎず、怖い連中が後ろに控えていることもなかりうと見定めたのだろう。男は美子に近づくくと、手首をつかんで路地裏へ引き込んだ。

「パンツを脱いで、処女の証拠を見せてくれるかな」

見ず知らずの男の前でパンツを脱いで——処女の証拠を見せる。破廉恥極まる、そして危険この上ない行為だが、美子の心に浮かんだのは（どうしよう？）というためらいだった。最初の二人の男たちの会話から、なんとなくだったが予想していた要求だった。しかし、どうするかまで決心して、この男に声を掛けたわけではなかった。

「処女膜を確認できたら、ジンジロ毛を三百円で買ってあげるよ」

からかい半分の要求を美子が即座に拒否しなかったもので、男も本気になったらしい。具

体的な金額を口にした。

「三百円ですか？」

美子は、逆に消極的になった。千円とか万円とか風呂敷を広げていたくせに、ずいぶんとけち臭い。

「そりゃあ、そうだよ。あんなに若くて可愛くて、しかもストリップ嬢をしているのに処女という稀有の存在の白鳥麗佳だから、霊験もあらたかつてもんだ。小便臭い小娘の毛じやあ、万車券はおぼつかない」

「……………」

どうやって、この男を怒らせずにこの場から逃れようか——それを考え始めたとき、男が猫撫で声を出した。

「とは言え、三百円じゃかわいそうだな。よし、白鳥麗佳が千円なら、お嬢ちゃんのは五百円だ。それなら文句はないだろ」

五百円。それだけあれば、往復の電車賃と封切映画と喫茶店と、百貨店でアクセサリーまで買える。羞ずかしいのをちよつとだけ我慢するご褒美にはじゆうぶん過ぎる——と、美子は決心した。

「買ってください。証明をすれば、いいんですね」

美子は男に背を向けてスカートの中に手を突っ込んで、パンティーを膝までずり下げた。それから……どうしていいか、分からなかった。

「あの……？」

「あ、ああ。そこに腰掛けてくれるかな」

男も、まさか美子がほんとうに証明の暴挙に出ると思っていなかったらしい。たじたじになりながら、建物の壁に沿って積まれているビール瓶の木箱を指差した——ときには、余裕を取り戻していた。

「そこで脚を広げて」

腰を下ろして脚を広げた美子の前に、男がしゃがみ込んだ。両手でスカートの裾を持ち上げようとする。

「あつ……」

美子をあわててスカートを押さえようとしたが、男に叱られて、びくつと手を引っ込めた。

「こら。処女膜を見んことにや、証明にならんだろうが」

処女膜を見てもらうためには、股座の中芯の奥底まで覗かせなければならぬという当然のことに考えが及んでいなかった。それをはつきり意識して、美子は羞恥で頭がくらくらしてきた。それでも、今さら後へは引けない。拒めば、これまでの勇気が無駄になってしまう。

「ううむ。割れ目が閉じていてよく見えないな」

男が右手を伸ばして股間に触れてきた。

「きゃっ……駄目です！」

「動くな。おとなしくしていれば、すぐに済む」

助けを呼ぼうかと一瞬考えて、すぐにその考えを捨てた。自分から持ち掛けて、自分からパンティーを脱いで——恥を搔くのは美子のほうだった。

男の指が股間のまん真ん中に押しつけられて、割れ目を左右に押し広げられる生々しい感触が……不思議なことに、そんなに不快ではなかった。男女の秘め事も、きつとこんなふうにして始められるんじゃないかな。そう思うと、腰の奥にむず痒いような感覚が生じた。

「ううむ。見ただけではわかりにくいな」

言い訳めいた独り言に続いて、男の指が侵入してきた。

「痛いっ……！」

小さいけれど鋭い痛みが股間に奔って、美子は叫んでしまった。指はすぐに引き抜かれ



た。

「さすがにきついな。指の先にコリコリしたのが当たったが、あれが処女膜か。後学のために、もつとよく見せてくれよ」

「いやです。ちゃんと証明できたなら、それでいいんでしょ」

「いや、まあ……実は俺、処女に当たったことなんかないんでね。千円で買ってあげるから、もすこし我慢してくれよ」

美子はちよつとだけ考えた。ほんとうにちよつとだけだった。

「もう、触るのはやめてくださいね。見るだけなら……」

「約束するよ。けど、座ったままじゃ埒が明かないから、そこに上がってしゃがんでくれないか」

「……？」

聖徳太子（昭和三十八年までの千円札）の幻影につられて、訳が分からないままに美子は、ビ

ールの箱に上がってしやがみ込んだ。男の頭がスカートの陰に隠れた。

「もっと脚を広げて……まだ閉じている。おっと、触らない約束だったな。自分で広げて見せてくれよ」

何を広げるのかは、言われるまでもなく分かっちゃおう。

(千円のためだもの)

右手をスカートの中に差し入れて、男の指の感触を思い出しながら、美子は自分で自分の割れ目を左右に広げた。ストリップショーでいう『御開帳』そのままの仕種だとは、美子には分かるはずもない。

男の頭が、スカートの中に潜り込む。

「ほう……ピンク色の簾すだれみたいなのが処女膜か」

男が手を伸ばそうとする。

「駄目です。見るだけです」

「そうは言うけど、毛をもらわんことにや、千円はあげられないよ」

男の指が割れ目のすぐそばの肌をこねくって——指を挿れられたときよりもずっと激しい痛みが肌に奔った。

「きやあつ……?!」

驚いて立ち上がりかけて、足元がぐらついたので、また腰を落とした。

男はポケットからハンカチを出して、五、六本もまとめて引き抜いた淫毛を丁寧に包んでいる。

それを見ながら、美子は（しまった）と思った。女の嗜みとして持ち歩いている裁縫セツト。あれには毛抜きも入っていたのに。

男が折りたたんだハンカチをポケットに仕舞うのを見て、美子も平静を取り戻すと木箱から降りて、パンティーをたくし上げた。

男が財布から千円札を抜き出して、美子の手握らせた。

「ありがとよ。これで、来週の競輪は必勝疑い無しだ」

物を売ってお客からお礼を言われるなんて、なんだかくすぐったい気分だった。

「しかし……なんだって、こんな場所で声を掛けたんだね」

質問というよりは、すこしでも長く堅気の若い娘と話をしていたかっただけだろう。

「白鳥麗華にあやかるつもりだったのかな」

この男の言葉が、美子の運命を大きく狂わせていくことになる。

「どうせなら、ひと駅先の競輪場で売れば、引く手もあまただろうによ」

「競輪場？」

「知らないのか。競馬くらいは知ってるだろ。あれと同じだ。走るのが馬ではなくて自転

車だがね」

男は、さらに何か言いかけたが——肩をすくめて美子に背を向けた。

「それじゃな。ありがとよ」

「あ、はい。ありがとうございました」

男はもう一度肩をすくめて立ち去った。男にしてみれば、悪戯を仕掛けた少女に礼を言われたような、妙な気分だったかもしれない。そして、競輪場に関して言いかけた言葉を呑んだのは——そこで淫毛を売るとしたら生じるだろうあれこれの厄介事が容易に想像できたからだだった。この小娘が、どんな目に遭おうとも知ったことではない。いや、小娘が、そ、う、い、う、目、に、遭、え、ば、、この淫毛に希少価値が生まれるというものだ。

もちろん。美子にはそんなことを想像できるだけの知識も無かった。毛抜きを使えば、そんなに痛くもなく、一回に千円（は無理でも五百円）。うまくすると、一日で月給と同じくらい稼げるといふ虹色の週末しか見えていなかった。

翌週の日曜日。美子はひとりで電車に乗って、男が言っていた駅へ行ってみた。いつもの駅から各駅停車でひとつ引き返す。

車内の雰囲気は、まるで違っていた。乗客は、崩れた服装の男性が半数くらい。みんな、小さな新聞をさらに小さくたたんで、熱心に読んでいる。申し合わせたように、耳に赤青の色鉛筆を挟んでいる。その色鉛筆で新聞に何か書き込んでいる人もいた。ちらつと盗み見たら、新聞は罫線で区切られた表のようになっていて、大きな字で人の名前が書かれた下に◎や△の記号、そして小さな文字で数字がびっしり並んでいた。色鉛筆での書き込みは、人名から人名への矢印だったり、○とか3↓26とか、美子には暗号か高尚な数学の計算にしか思えなかった。毛を買ってくれた男が2枠総流しとかニイゴオと言っていたのを思い出して、これのことかなと見当をつけてはみた。

駅を出ると、競輪場を探す必要はなかった。あちこちに案内の立て看板や張り紙があった。なにより、ほとんどの人たちが、そちらへ向かっている。

道の途中には、いろんな食べ物の屋台が出ていて、まるで縁日みたいだった。女子供の姿がほとんど見当たらず、男たちはたいてい暗号表のような新聞と色鉛筆を持っている。

通行人もテキ屋も、怪訝あるいは好奇の眼差しを美子に向けている。いくらかは性的な関心も含まれているだろう。美子も、ストリップ劇場の横に立っていたときよりもいつもの居心地の悪さを感じながら、それでも競輪場へ向かった。

野球場みたいに高い壁で囲まれたスタジアムの周囲には屋台がぼつぼつと散らばっていたが。何を売っているのかわからない、屋台というよりも背の高い椅子を木の箱で囲んだような店が、やたらと目についた。

「当たり前屋のジョーとは俺のこと。昨日の第7レース、ロクサンの五千二百円も、前開催のニイゴオ、一万二千とんで八十円も、全部一点買いでドンピシャバツチりだぜい」

「よろしいか、次のレースは千葉ラインでズブズブ。そう考えるのは、素人の浅墓見附。一匹狼の捲りが決まるか、それとも千葉ラインの片割れが残るか。ここからは、ただじゃあ聞かせられないね。おっと、ありがとよ」

若い男が十円玉を数枚差し出すと、講釈を垂れていた中年男が小さく折りたたんだ紙片

と交換に受け取った。若い男は紙片を開いて他人からは見えないようにして覗き込む。

「ちえ、つまりはそういうことかよ」

「鉄板だよ、鉄板」

二人のやり取りは——いや、それ以前に啖呵売そのものが、美子にはチンプンカンプンだった。興味を引かれてしばらく観察していると、不意に肩を叩かれた。

「堅気のお嬢ちゃんが、独りで鉄火場通いかい？」

振り向くと、ノーネクタイに派手な縦縞の背広を羽織った三十前後の——ヤクザだった。舎弟らしい青年を二人引き連れている。

「あ、いえ……」

逃げ出そうとしたけど、足がすくんで動かない。

「人が集まっているので、なんだろうって」

「ここは競輪場だ。自転車競争だな。どの選手が勝つか、当てっこする。お上公認の博打



ってわけだ」

「あのお店は、何を売っているんですか？」

意外と人なつこい口調に気を許して、思い切って訊ねてみた。

「なるほど。あれだけはタカマチにやねえからな。予想屋だよ」

「……？」

「次のレースを予想して、その目を売ってるのさ。ほら……」

人なつこいヤクザが、紙片を売っている予想屋を指差した。

「博打のプロなんですね」

ヤクザが失笑した。

「そう見えるのかい」

「だって……お店の上に貼ってある四角い紙。あれ、当たり馬券なんですよ。あんなにた  
くさん」

「なるほど。こりや、ほんとに不思議の国に迷い込んだアリスだな。お嬢ちゃんは、二つ間違ってる。ありや馬券じゃねえ。シャケンていうんだ」

自転車だから車券かと、それはすぐに分かった。

「それと、もうひとつ。お嬢ちゃんだって、全レースを簡単に的中できるんだぜ」

「ええっ……?!」

「全部の目を買えばいいのさ。丁半博打なら、同時に丁と半に賭けるようなもんだ」

美子でも、博打の寺銭くらいは知っている。丁半の両方に賭けたら寺銭の分だけ負けてしまう。

「当たった車券だけを、ああやって貼り出してる」

なぜ、そんなことをするのかは、美子にも分かる。宣伝広告だ。

「ほんとうに百発百中なら、誰にも教えずに、てめえで買ってらあな。これで気が済んだかい？」

「あ、はい。ありがとうございます」

美子は、ぺこんとおじぎをした。

「それじゃ、足元の明るいうちにとつとと帰れよ。俺たちも目を光らせちゃあいるが、不心得な野郎もわんさかいる。こんなふうにな」

ヤクザは美子に近づくと、ぽんつと尻を叩いた。

「きやつ……」

不意打ちに驚いたが、これくらいは職場で慣れっこだった。工場長なんか、朝の挨拶代わりに胸を揉んだりもする。美子は貧弱だから、ろくに挨拶をしてもらえない。そのせいでとは思いたくないけれど、同期の二人より月給が五十円安い。

文句を言おうかどうかどうしようか迷っているうちに、ヤクザは美子に背を向けて歩きだしていった。

その背中を見送って、それから心を立て直した。貴重な休日をつぶして電車賃まで使っ

て『出稼ぎ』に来たんだ。これくらいのことです尻尾を巻いてたまるもんですか。様子見だけにしておこうかなという迷いは、むしろ今の出来事で払拭されていた。

スタジアムのまわりは公園みたいな広場になっている。ブランコも滑り台もないけれど、ベンチはあった。広い自転車置場から離れていてひと気の少ない一角にあるベンチまで行って、美子は『作戦』を練った。

競輪場へ入るのはやめておこう。ゲートのところにお巡りさんが立っている。予想屋さんと同じように、ここで『商売』をすることに決めた。

でも、予想屋さんみたいに声を張り上げて呼び込むなんて無理。というよりも……してはいけない。自分のしようとしていることが、予想屋よりもいかがわしくてストリップよりも恥ずかしいことだと、美子は自覚している。だって、処女の毛が靈験あらたかなら、その持ち主が縁日のクジでスカばかり引くはずがない。ストリップは見せるだけだが、美子は（大袈裟にいえば）身体の一部を切り売りしようとしている。

そのことは深く考えないようにして。どんな人に声を掛けようかと、そちらへ考えを向けた。

早々とスタジアムから出てくる人は駄目だ。負けてお金の持ち合わせが乏しいに決まってる。大勝ちした人もいるかもしれないし、よく観察すれば見分けられるだろうけど、そういう人は、自分の強運や推理能力を信じて、御守なんか興味無いんじゃないだろうか。

これからスタジアムへ行く人で、一人で、優しそうで、お金をたくさん持っていて千円くらいにびくともしない人——なんて、いるんだろうか。

声を掛けて、それからどうするかは、広場を歩いているうちに決めていた。広場の隅に公衆便所があるのだけれど、使う人はほとんどいない。あそこの裏側なら、人目につかないし、万一変なことをされそうになったら、大声で助けを呼べる。

美子はベンチを立って公衆便所まで行き、目論見通りなのを確かめた。

(さあ、商売、商売)

美子は入口の近くまで戻って、客の品定めを始めた。

最初に目をつけたのは、こんな場所には珍しく、きちんと背広を着てネクタイも締めた四十歳くらいの人だった。後ろから追いついて、背中に声を掛けた。

「小父様。しよ、処女の毛の御守は要りませんか？」

男は足を止めて振り返ったが、怪訝そうな顔で一瞥すると、足早に立ち去った。

もつとハキハキと口上を述べないと駄目なのかなと思つて、今度は白い背広に帽子までかぶった初老の人に声を掛けてみたが、首尾はもつと悪かった。

「若い娘さんが、ヤクザな真似をするんじゃない。どうしてもお金が入り用なら、相談に乗ってあげるよ」

「あ、いえ……ごめんなさい」

あわてて逃げ出した。ただお説教をされただけなのか、ナンパされたのか、よく分からなかった。

一度や二度の不首尾でくじけちゃ駄目。千三つという諺だってあるんだから——と、入口へ戻りかけて。

「面白いことをしているね」

後ろから肩を叩かれて、今度はほんとうにびっくりした。

「きやつ……?!」

振り返ると、ダボシャツに革ジャンを羽織った若い男だった。

「処女のお毛々を売ってくれるんだって？ 本物なら買うぜ。幾らだい？」

「ここが正念場——と、美子は意気込んだ。

「一本で五百円です」

まとめて引っこ抜かれてはたまらない。

「処女膜をご自分の目で確かめるのでしたら、別料金で五百円です」

先週の経験を基に考え抜いた料金だった。

「へえ？ どうやって確かめるんだ？」

「スカートの中に顔を入れて……見てください」

「面白いね。よし、まずは五百円だ」

男はズボンのポケットから紙幣の束を取り出して、五枚を抜き取った。九枚をひとまとめにして別の一枚で带状に束ねた、いわゆるズク。こんなふうにして金を持ち歩いているだけでも、この男が遊び人を気取っていると——美子には分からない。ちなみに、本物の遊び人は堅気相手にズクを見せびらかすような真似はしない。

「で、どうすんだい？」

さすがに男は五百円をすぐには渡さず、美子の目の前でひらひらと振った。

「こちらへ……」

美子は先に立って、男を公衆便所の裏手へ連れ込んだ。冬のボーナスで買ったハンドバッグから懐中電灯を取り出して、男に持たせた。脹脛まである野暮ったいスカートをたく



し上げ気味にして両手でパンティを膝までずり下げ、裾の前をつまんでふんわりと広げた。

「……見てください」

男はヒュツと口笛を吹くと、美子の前にしゃがみ込んでスカートの中に頭を突っ込んだ。

ふだんは布に包まれている肌に、男の息が掛かる。炎を押しつけられているほどに熱く感じた。

男の指が、割れ目に触れた。自分で手鏡に映して覗き込んで、うんと広げないと穴の中の凸凹は見えないと確認している。膜というよりはバリケードみたいだというのが、そのときの感想だった。それはともかく。男に触られることも覚悟していた。

「指は挿れないでくださいね」

男の指で割れ目が押し開かれて、中にまで熱い息吹を感じる。美子は息を詰めて、ゆっくり十まで数えてから、男に声を掛ける。

「もう、いいでしょ。見えましたよね？」

指が引つ込められて、男の頭もスカートから出た。

「なるほど。確かに他の女の穴とは違つて、ちよいと奥に簾みたいのが張つてるな」

男はズクをばらして百円札を十枚、美子に手渡した。

「それじゃ、お毛々を売ってもらおうか」

美子は懐中電灯と交換に毛抜きを渡した。

「抜くのは一本だけですよ」

「へえ、抜かせてくれるのかい。サービスがいいね」

実は、見ないで一本だけ抜くのは至難の業だった。それに、一個十五円のコロッケを値切つて三つ三十円で買うよりも、言い値で二個買つて後から一個おまけしてくれたほうが嬉しい。そこから思いついたサービスだった。

男がまたスカートの下に潜り込んで——自分で抜くよりも痛かったから、もしかしたら何本かひとまとめに抜かれたかもしれない。

「あの……よろしかったら、これに包んでください」

京花紙を小さく折りたたんだのを男に手渡した。男によってはハンカチを持たず、ズボンの尻で手を拭いているのを（様子のいい若い男性でも、これでは百年の恋も醒める）しばしば工場で見ているので、これはサービスというよりも、たとえ毛の一本でも大切に扱ってほしいという一種の自己愛だった。

「至れり尽くせりだね。あんた、いいバイニンになれるよ」

男は京花紙に淫毛（三本も抜かれていた）をたたみ込んで胸ポケットに仕舞うと、その手を伸ばして美子の乳房を下から掬い上げるようにして揉んだ。

「きや……」

美子が軽く身を引くと、若い男は笑いながら去って行った。

毎日お尻を触られても給料は五十円しか変わらないのに、これは千円。そんな計算は成り立たないけれど、そんな気分になった。

日雇いの日当よりもたくさん稼いだけけれど、まだ店仕舞いするつもりはない。美子はまた入口へ引き返して、次の客の物色にかかった。お堅い上品な感じの人よりも、ヤクザっぽい人に脈があると見当がついたので——美子の振る舞いは、遊び人に次々と声を掛けている娼売女に見えなくもなかった。白昼堂々のそんな行為がどれだけ人目を引くか、美子は気づいていなかったのだが。

——その日は七人が話を聞いてくれて、そのうちの四人が買ってくれた。例外なく自分の目で確かめたがったので、四千円の稼ぎ。週末ごとに映画館のハシゴをして百貨店でランチを食べてもお釣りがくる。もちろん、そんな贅沢をしたらどんな噂が立つか分かったものではないから、大半は貯金しておく。お嫁入りのときに親の負担を軽くできる。それだけじゃない。うんとお金を貯めて、お洒落な花屋さんだって開けるかもしれない。小学生が作文にでも書きそうな夢が、しかし、ぐっと現実味を帯びてきて、美子はささやかな幸せの絶頂に立っていた。

## ひとりは危険

月曜から金曜まで、美子は上の空が続いていた。半田付けの作業をいつもの三倍くらい失敗して、職長からは大目玉を食らい、工場長にまで呼び出されてしまった。気合を入れると称してビンタを張られたのだが、女の子の顔に傷をつけてはいかんということで、胸をはだけて乳房を叩かれたうえに、お礼まで言わされた。

こんな仕事は辞めてしまおうかとは、しかし思わない。花屋さんなら威張れるけれど、淫毛売りなんて親が泣く。世間様に後ろ指を差される。

そういった葛藤は、しかし半ドンの後になれば忘れ去って、日曜には浮き浮き気分と戦場に赴く悲壯とをチャンポンにして、また競輪場へ乗り込んだのだった。

——首尾よく、最初に声を掛けた男に『処女鑑定』込みで淫毛を買ってもらい、男が立ち去ってから美子も表へ出ようとしたところへ、別の男が立ちふさがった。

「このクソ餓鬼め。大嘘をつきやがって」

「……？」

男の顔には、なんとなく見覚えがあった。先週の三番目か四番目の客だったかもしれない。

「なにが処女だ。有り金勝負で、大コケだ。ライン違いもいとこじゃねえか」

後半の意味は分からなかったが、靈験を信じて大勝負をして負けたということなのだろう。

「あたし、間違いなく処女です。お兄さんだって、ちゃんと得心してくれたじゃないですか」

言い掛かりに反駁した美子だったが、男の気色に声は震えていた。

「あたし、毛は売りましたけど……賭け事で勝てるなんて、ひと言も言ってますん」

「じゃかましい。屁理屈を言うな。金を返せ。千円だけじゃない。すった金も弁償してもらおうじゃないか。五万だ」

金額の大きさに美子は仰天した。五万円もあれば、三種の神器（テレビ、洗濯機、冷蔵庫）のひとつが買える。それを一瞬の賭け事に費やすなんて正気じゃない。

「へっ。どうせ払えねえよな。せめて一分だけでも身体で返してもらおうじゃないか。そうすりゃ、二度と阿漕な商売も出来なくなるってもんだ。世のため人のためにならあ」

身体で返すとはどういう意味か、それくらいは分かる。まさか、この場で強姦に及ぼうとでもいうのだろうか。

「こつちへ来いよ」

男は美子の腕をつかむと、敷地に隣接している林の中へ引きずり込もうとした。奥深くまで連れ込まれたら絶体絶命だ。

「誰かあ！ 助けてっ！」

叫び声を上げると、男がもう一方の手で美子の口をふさぎにかかる。

無我夢中で、その手に噛みつく。

「あ痛うっ……」

「助けて！ 火事です！」

人殺しとか呼ばわると、自分にも危害が及ぶのを恐れて逃げ腰になる人もいる。火事なら、とにかく駆けつけてくれる。どこかで読んだ知識をとつさに思い出して叫んでいた。

「ええくそ、黙れ！」

男が、ばしんばしんと頬に往復ビンタを張った。また噛まれないように掌で口をふさぐ。

「んぐうう……」

強い力で引きずられる。自由なほうの手で男の顔を引っ掻いたが、背後へまわられて、つかまれている手を背中へねじ上げられた。そのまま後ろへ引きずられる。万事休す――



と諦めかけたとき、二人の警官が駆けつけてくれた。

「おまえ、何をしているっ！」

男は美子を突き飛ばして、林の奥へ逃げて行った。警官は男を追おうとはしなかった。美子を左右から取り囲んだ。

「大丈夫か？ 何をされたんだ？」

「あの……あの」

動転していて、うまく言葉が出てこない。

「詳しい事情は詰所で聞こう。ついて来なさい」

言葉は優しいが、さっきの男と同じように美子の手首をつかんで、ぐいぐい引っ張る。お巡りさんなら安心だから、美子も逆らわなかった。

連れて行かれたのは、スタジオムの裏手にある小さなプレハブ小屋だった。入口の上に掲げられた木札に『警備員詰所』と書かれているのに、美子は気づかなかった。気づいた

としても、警備員と警察官との違いは理解できなかつたかもしれないが。

詰所では二人の警備員が休憩を取っていた。

「どうした？」

「この娘が、客と揉めていてな。まあ、事情聴取と……なにやかや。終わったら、ちゃんと交代するから。入場口と、このあたりと、一人ずつ配置に就いてくれよ」

「けっ……必ずだぞ」

休憩中だった二人が出て行って、小屋の中には助けてくれた警備員と美子の三人。部屋の真ん中には雑誌や飲料が雑然と置かれたスチールデスクが据えられ、そのまわりをパイプ椅子が囲んでいる。警備員のひとりだけが、長辺を挟んで二脚が向かい合う形に並べ直した。

「そこへ座れよ」

民主警察にしては横柄な物言いだ、美子はなにも疑わない。

「どうして、ああいうことになったんだね？」

美子は説明に詰まった。自分の『商売』が、なにか法律に違反しているかもしれないまでは考えたこともなかったが、いかがわしいという認識はあった。

「ええと……よく分かりません」

「自分のしていることが、分からないはずがないだろう」

向かい合って座っている警備員が、机をドンと叩いた。

びくつと怯える美子に、警備員が言葉をかぶせる。

「おまえ、先週も来ていたな。おまえがトイレの裏へ連れ込んだ者から事情を聴いているぞ。処女のマン毛を売ると称して、いかがわしい行為をしているな」

今さらながらに美子は、自分が人目を引いていたことに気づいた。言い逃れはできそうにない。

「……はい。さっきの人は御守の効き目がなかったと言って、それで……」

「つまり、おまえは詐欺を働いたんだな」

「違います。毛が御守になるとか、そういうことは一切言っていません。ただ、あたしが処女だと納得してもらって、それで……売っていただけです」

「どうやって、相手に処女だと確認させたんだ？」

売った相手から話を聴いているのなら、知っているはずだ。隠したらお巡りさんの心証を悪くすると、美子は判断した。

「実物を……見てもらいました。しよ、処女膜を……」

「それが本当なら、公然猥褻罪だけだが——もしも処女ではなかったら、詐欺罪も加わる。実刑判決は免れないな」

実刑判決、刑務所。そんなことになったら、二度と家の敷居はまたげない。どころか、工場も馘首クビになってしまふ。

「処女かどうか、確かめさせてもらおうぞ」

「……はい、調べてください」

罪を免れることしか、美子の頭にはなかった。言われるままにスカートを下ろし、パンティも脱いだ。

「机に腰掛けて」

入口をふさぐように立っていた警備員が近づいてきて、美子の両足首をつかんだ。真上に引き上げてV字形に開脚させる。

「きゃ……」

美子は後ろに手を突いて身体を支えた。

「どれどれ」

向かい合って座っていた警備員も美子の前まで動いて——手を股間に伸ばした。

両手を使って左右に割り開かれ、さらに内側の肉襞までつまんで引っ張られた。こんな羞ずかしいことをする『お客』はいなかった。けれど、取り調べを受けているという認識が、美子の羞恥を抑え込んでいた。

「ふうむ？ どうもよく分からんな」

覗き込んでいた警備員が、わざとらしく頭をひねった。

「しょうがない。突っ込んでみて、出血するかしないか確かめよう」

あろうことか、バンドを緩めてズボンをずり下げた。

「やめてください！」

さつき以上に身の危険が迫っていると気づいて、美子はうろたえた。

「そんなことされたら……お嫁に行けなくなりませす！」

具体的にはどういう行為かは知らされずに、身を慎む決まり文句として幼時からそういうふうにならされてきた。

「それじゃ、刑務所に行くか？」

「……………」

そんなふう脅されると、抵抗を封じられてしまう。

「処女だと分かれば、無罪放免してやるよ。もう商売はできなくなるだろうが、更生のチャンスだと思え」

足首をつかんでいた警備員が机の向こう側へまわって、さらに深く美子を折り曲げた。暴れないように、手首と足首をひとまとめにして押さえ込む。

「初体験が達磨返しってのは、自慢できるぜ」

達磨返し。後世に言う『マンガリ返し』である。四十八手が教える正しい達磨返しでは、女の脚を折り曲げて左右別々に縛るのであるが、縛らない形も、脚を伸ばしたままでも、同じように呼ばれていた。

警備員がズボンとパンツをずらして、すでに怒張している逸物を露出した。

なにかが、おかしい。こんなの、取り調べじゃない。ようやく、美子はそれを疑った。

けれど、まだ迷いがあった。偽警官という言葉も頭に浮かんだが、まさかという思いが強い。ひとりだけならともかく、四人がグルになって、しかも交番にまで詰めているのだから

ら、やっぱり本物のお巡りさんだろう。

#### 注記

警備会社の発足は一九六四年です。当時は法的な規制が無く、警察官に酷似した制服も認められていました。また、警備員の質も悪くてヤクザ紛いの言動も多く、市民とトラブルになることも屡々でした。

警備会社が発足する以前には、大きな催し物の群衆整理、株主総会の正常運営（シャンシャン総会）、労働争議の鎮圧などに、ヤクザや手配師が動員した私設警備員が使われていた事実があります。

この物語の舞台は一九六一年ですから、公営ギャンブルの主権者に雇われていても、このように無法を働く警備員は存在していなかったと考えるほうが不自然でしょう。

美子が戸惑っているうちにも、男がのしかかってくる。まさに亀頭が割れ目に押しつけられようとした、そのとき。

ボタンとドアが蹴り開けられた。

二人の警備員が、ぎくりとふり返って。



「馬鹿野郎！ なにをしてやがる！」

闖入してきた男の一喝を浴びて、直立不動の姿勢を取った。ズボンをずらしていた男の逸物は、最敬礼してしまう。

「見苦しい。さっさと仕舞え」

あわてて起き上がった美子には、口調をやわらげる。

「お嬢ちゃんも、身繕いしな」

「あ、はい……」

机から降りて、散乱しているパンティとスカートを拾い、部屋の隅で男たちに背を向けて身に着けた。

「おまえらは、謹慎処分だ。おい、ヤス。こいつらを組まで連れてけ」

入口から若い男が顔だけを覗かせて、二人の警備員に顎をしゃくった。

「サブ。おめえは、外のやつに替わって張り番だ」

別の若い男が、これも入口から顔だけ突き出して。

「へい、若。お愉しみですかい」

「馬鹿野郎。そんなんじゃねえよ」

二人の警備員がすすごと退出して、ドアが閉じられた。蹴り開けられても、どこも壊れなかったようだ。

「さて、と……」

闖入して、あつという間に場を収めた男が、パイプ椅子に腰掛ける。

「おめえも、こつち来て座りな。途中から見えていたヤスの話で大方は分かっちゃいるが、おめえの口からも聴いておきたいことがある」

美子は気圧されるままに、机を挟んで男の前に座った。

派手な縦縞の背広を見るまでもなく、男の顔を思い出していた。先週、美子に声を掛けて——予想屋のことを教えてくれた（ついでに尻も触った）ヤクザだった。

「うちの若いのが、まあ盃はまだだが、とにかく迷惑を掛けたな。八田組の若頭として、この通り謝る」

椅子に座ったままだったが、ヤクザは美子に向かって頭を下げた。

「いえ。ありがとうございました」

さっきの二人よりずっとごつくて凄みのある男を前にして、美子は怯えたりしなかった。だって、貞操の危機を救ってくれた恩人だ。白馬の王子様——ではなくて、盗賊団の頭目みたいな雰囲気だけど。きつと、義賊なんだろう。

若頭は胸ポケットから洋モクを取り出して、ごついライターで火を点けた。オイルの匂いが美子まで届いた。若頭は一服して。うつむいている美子を見詰めて喉の奥で笑う。

「処女のマン毛売りか。おもしれえ商売を考えついたもんだな」

「……………」

見られていた。それとも…………。

この人は、あたりを仕切っているヤクザの幹部だ。もしかしたら、先週から目を付けられていたのかもしれない。それなら、こんなにタイミング良く救いに現われたのも偶然ではない。何もかも承知で、そのうえ何を聴こうというのだろうか。

「独立独歩の商いがどれだけヤバイか、身に染みて分かっただろ」

若頭の言う通りだった。逆恨みする客は、これからも出てくるだろう。乱暴されるだけならまだしも（じゃないけれど！）、警察沙汰になったら身の破滅だ。考えが浅過ぎた。

「……身に染みて懲りました。二度と、こんな馬鹿なことはしません」

「やめろとは言ってねえよ」

「え……？」

美子は顔を上げて、若頭を真正面から見詰めた。服装のせいでごつい印象を持っていたが、よく見ると丸みの少ない面長で、映画俳優の誰かに似ているところがあつた。オールバックの髪型も、ヤクザっぽいというより精悍な雰囲気漂わせている。

「八田組がケツ持ち——御膳立てをしてやるから、それで稼いでみないかって相談だ」

ほとんど反射的に、遊郭とか遠洋漁業とかが頭に浮かんだ。そういった過酷な職場を紹介されて、ヤクザに掠め取られた前借金を完済するまでは逃げられない。

「嫌です。これからは、真面目に働きます。ごめんなさい」

美子は立ち上がって、若頭から逃げ出そうとした。だが、美子が座っていたのは部屋の奥だった。若頭が美子の前に立ちはだかった。

「最後まで話を聴けよ。なにも取って食おうてんじやない」

「嫌です。帰してください。もう、こんな所へは来ませんから」

救ってくれたのだから味方だという甘えがあったのかもしれない。逆恨みの客に対したときよりも強く、美子は抵抗した。

しかし若頭は——義賊から凶賊に変貌した。

## 女樂器の調べ

「てめえ。優しくしてりや、つけあがりやがって」

若頭は左手を伸ばして、美子の喉をつかんだ。右手をゆっくりと振り上げる。

「やめて……」

美子は首根っこを押さえられて、顔をそむけることもできない。

バシン！

若頭の右手が頬を張って、目の前を振り抜かれた。

「痛いっ……っ！」

バシン！

手の甲が右の頬にも叩きつけられた。

「女にや理屈は通じねえ。女に言うことを聞かせるには、これか……」  
若頭は拳固を美子の目の前に突きつけた。

「それとも、これだ」

人差し指と中指の間から親指を突き出して見せつける。

注記

「これか……これだ」

このシーンは、阿佐田哲也『麻雀放浪記』（女衞の達）から借用しました。

「俺はフェミニストだからよ、女に手は上げたかねえ。とは言っても、こっちは商品価値を台無しにしちまうからなあ」

そんなことを言いながらも、喉をつかんだまま美子を机に押しつけて、カーデガンの前をはだける。

「おとなしくしてりや、痛い目をみないで済む。暴れたり大声を上げたら、容赦しないぜ」  
こんな所で処女を奪われるのか。せめて、痛いのは赦してほしい。美子は観念して、かすかに首を縦に振った。

若頭が手を放して、喉の圧迫が消えた。

「けふっ……」

大声を上げるなどという脅しに怯えて、咳き込むのはばかった。

若頭の右手がブラウスの合わせ目に差し込まれて、ボタンがはずされていった。それまでのがきつくなって新調したばかりのブラジャーが剥き出しになる。若頭は背中に手を差し入れて、慣れた手つきでホックをはずす。

「まだ発展途上とところか。胸は小さくても度胸は大きいな」

若頭が乳房に両手を伸ばす。

美子は逃げなかった。いや、動けなかった。親指の腹が乳房を掠める。



「あっ……っ？」

乳首から心臓へ向かって電気が奔ったような感覚が生じて、美子はびくつと身体を震わせた。

「おめえ、感度がいいな」

左右四本ずつの指が乳房の根元にふわっと触れて、膨らみの輪郭をなぞった。同時に親指の腹が、今度は乳首を転がした。

「ひゃあっ……やめてください。駄目です」

嫌とは言わずに駄目と言った。怯えながらも、美子は正直だった。

「なにが駄目なんだ。感じてるんだろ？」

さわさわ、さわさわと——十本の指が乳房を這い回る。電気が乳房から心臓に奔り、さらに背骨にまで伝わった。

身体を洗うときなどには、乳房にも触れる。しかし美子は、性的な刺激を求めて自分の

身体をさわった経験がなかった。生まれて初めて知る性感だった。

「ああっ……駄目、やめて……くううう……んん、ん」

赤ちゃんに栄養をあげるための器官が敏感なことは、もちろん知っていた。膨らみ初めの頃は、机の角に服の上からちよつと擦っただけでも鋭い痛みが奔った。強くつまんだりしたら、胸を抱えてうずくまってしまふほどだった。そういった痛みとの記憶と、今生じている感覚とは、まるで懸け離れているようでも根っ子はひとつのように思えた。

若頭の指が乳房から離れたときには、思わず不満の声を漏らしてしまった。が、スカートをめくられてパンティに手を掛けられると、怯えと恐怖とが甦った。

「嫌っ……そこは赦して！」

「心配するな、処女は守ってやる。だから、こうやって手間暇を掛けてるんだ」

美子は若頭の言葉を、すうつと信じた。先週親切に教えてくれた記憶と、ついさつき偽警官から救ってくれた記憶とが、美子の中で微かな信頼につながっていた。

胸をはだけられ下半身を剥き出しにしたあられもない姿で、美子は机の上に仰臥していた。脚は机から垂れている。手の持つて行き場に困って、顔を覆った。

股間に指を感じて、美子は戸惑った。予期していたし覚悟もしていた。しかし指が触れたのは中芯ではなく、太腿の付け根——鼠径部だった。二本の指が閉じ合わせた太腿の奥まで穿ち、左右の窪みをくすぐりながら下腹部へ向かう。

「あ……んんん」

くすぐったいんだけど、撫でられている箇所から割れ目の深奥——経験豊富な女性なら子宮と表現するだろう部分へ向かって、さざ波が押し寄せた。乳首に奔った電気よりもささやかで柔らかく、しかしこれも快感だった。

五度十度と刺激が繰り返され、その間も双つの乳首に指が触れている。鋭い電気のような快感と、くすぐったさの混じったさざ波のような快感と。それが背骨の中で渾然と混ざり合っている。

(あれ……?)

左右の乳首と鼠径部と。でも、手は二本。勘定が合わない。美子は薄目を開けて胸元を見た。あやうく吹き出しそうになった。手がいつぱいに開かれて、親指と小指とが左右の乳首に触れていた。

おかしみは、しかし淡い感動に昇華した。

(こんなにも……)

あたしに快感を与えようと努力してくれている。まだ残っていた怯えが、消え失せた。じゅんつと、股間に熱い滴りが生じる感覚があった。

それを若頭は感じ取ったのか、冷静な観察の結果なのか。人差し指と中指で鼠径部を刺激していたのを、人差し指と薬指に替えて——中指で淫裂を軽く抉った。

炎の塊に穿たれたよう衝撃が、美子を貫いた。

「ひゃあっ……?!」

炎は熱かったけれど、痛みは伴わなかった。逆だった。くすぐったさと電気をごちゃ混ぜにしたような——快感だった。

「これくらいできやあきやあ言つてちや、喉が潤れちまうぜ」

淫裂の内側を何度かくすぐってから、その指がさらに上まで動いた。

「いやあああっ……！」

凄絶な快感に、美子は悲鳴をあげた。乳首に感じている鋭い電気。それが百倍も太くなつたような衝撃、くすぐったさの混じらない純粹の快感だった。

「おめえ、自分でイタズラしたことがないみたいだな」

美子は言葉の半分も理解できないまま、無意識にかぶりを振っていた。意識をつなぎ留めるには、快感が凄まじ過ぎた。

「じゃあ、こんなのはどうだ。腰を……もう抜かしてるか？」

若頭の方厚い胸板が目の前から消えて——ぬめっとした感触が、凄絶な快感の源を襲つ

た。

「あっ……?!」

美子が小さく悲鳴をあげたのは、快感のせいではない。何をされているか理解して、戸惑ったのだ。

(おしっこの出るところ……汚ないのに)

相手を不潔と思ったのではない。なんとはなしに、申し訳ない気持ちになった。のは、数秒。

ずじゅうううっ……

「ひゃああああっ……!」

美子は甲高い声で叫んだ。割れ目の頂点から腰全体に向かって、真っ白な爆発が広がった。指で触れられたときと違って、凄まじい快感が振動している。

何も考えられなくなった。そこを口で吸われているということだけは、かろうじて理解

できていた。

「駄目です……やめて！」

一瞬、振動が止まった——のは、息を吐くためだった。

ずちゆう、じゅじゅじゅつ、ちゆうちゆう。

「あああつ、ひゃああああつ、くうちゆうちゆう」

強弱をつけて吸われて、それにつれて悲鳴にも緩急強弱が生じる。さながら美子は、若頭に奏でられる楽器だった。

美子は上体を起こして、股間に嵌まり込んでいる頭を押し戻そうとしたが、まるで腕に力が入らない。逆に、片手で簡単に押し倒されてしまった。

「まだまだ。ここからが、ハモニカ勇次の本領だぜい」

敏感な一点が、唇に啣えられた。

(……………?)

舌で舐められるほどの快感はなかった——のは、一瞬間だけだった。

「グルグルグルグル……」

若頭が、トランペットでも吹くように唇を狂わせた。その振動が、美子の敏感な一点をすっぽりと包んで。

「駄目ええええええ……やだ、なにか……来る！」

身体全体が透き通ってしまふような大爆発。と同時に、周囲からなにかが押し寄せてくる。

「うあああああつ……ちやうよう！」

〇〇ちやう。その空白を埋める言葉を、美子は知らない。美子はフォルテツシモで吹奏されていた。

美子は両脚をピンと伸ばして、こむら返りを起こしたように震わせている。足の指があり得ないほどに折れ曲がっている。両手は机の表面を引っ掻いている。紛れもない性的



絶頂の反応だった。性的に未熟な処女が到達できるはずもない領域だった。

若頭が息を吐き切って吹奏を終えると、美子の全身が弛緩して、睫毛一本すら動かなくなつた。意識は失っていない。白く柔らかな雲に包まれて空中を漂っているような、女にだけ許された余韻を噛み締めていた。

若頭が立ち上がって、勝利の一服をくゆらす。

紫煙の匂いが美子を正気づかせた。

「あたし……」

どうしちゃったんだろう。その言葉を言い終わらないうちに、唇をふさがれた。

「んむうう……」

ふだんなら身を引くか、それができない相手なら息を止めるかしているヤニのおいが鼻いっぱいに広がって、なぜか不快ではなかった。男くささだと思つた。舌を絡められて、されるがままになつているところか、自分からも積極的に絡め返した。

いつか美子は机に仰臥したまま、その腕は若頭の背中をきつく抱きしめていた。

人心地を取り戻した美子が、若頭の『話』に逆らえるはずもなかった。

若頭の名は八田勇次といった。八田組を興した親分の息子。上に兄がいたが、戦死している。

### 厳そかな淫事

「参拝に来駕くだされた皆様には、まずは厳しい現実を見詰めていただきたい」

競輪場とは反対の方角にある地方競馬場。そこから二キロほど離れた地にある寂れた神社。衣冠に身を正した神主が、十三人の参拝客を前に、ものものしい口調で講話を垂れて

いる。巫女装束に身を包んだ美子は、その横に佇立して虚空を見つめていた。稽古で何度も聞いている神主の言葉を、自然と心の中で繰り返している。それほど退屈だった。

神主は言う。皆が違ふ勝ち馬に票を投じれば、当たるのは一人きりである。また、大欲を掻けば靈験はたちどころに消え失せる。『舌切り雀』で大きな葛籠を欲張った意地悪婆さんを見るがよろしい。

「では、なにゆえに御守を持つのであるか。心穏やかに頭涼やかに、立ち振る舞うためである」

甲の馬が勝つか乙が勝つか。甲が勝つては利が薄いとして乙を買うのは大欲である。一着二着は甲乙と並ぶか、甲丙と来るか。そればかりを考えて、乙丙の並びを見落としてしまふ。これは頭に血がのぼっているからである。このようなとき、御守を握り締め神の御加護を祈願すれば、心落ち着き頭冴え渡り、見落としていたものも見え、大欲を戒める心を取り戻すであろう。逆に、推理には自信があるのに、あまりに大胆な目なので土壇場で

怖じ気づいて見送って、そういうときに限って予想通りになってしまふ。こんなときは、御守の靈験を信じて少額でも買っておく。たとえ外れても自分に納得できるであろう。

「鰯の頭も信心からと申すが、節分会に鰯を軒先に飾って厄除けとするのも古人の知恵である」

分かったような騙されているような——つまりは、逆恨みされないための予防線なのだが、神主さんに厳そかな口調で説教されると、なんだかありがたく聞こえてしまふ。

神主の講話が終わると、いよいよ神事というよりも淫事の始まりである。

供え物をすべて取っ払った祭壇に美子が横たわる。へその上で手を組んで、動かない。

この一か月、競馬の開催を待つ期間を利用してリハーサルを繰り返してきた。手順は、すっかり頭にはいつている。そもそも、美子は複雑な演技を求められていない。恭々しくおっとりとした振る舞えば、それでいいのだ。

神主が美子の上の空間を御幣で払って祝詞を唱え始めた。

「とおかえみたえとおかえみたえ。かけまくもかしこきいちきしまひめのみことのおおまえをおがみまつりてかしこみかしこみもうさく」

ぼんやり聞いていると意味不明な呪文にしか聞こえない。けれど、ことさらに区切つて発音するので容易に聞き分けられる部分もある。

「この穢れなき乙女を依り代となし、当地において当月に催される勝ち馬当てに御靈験を顕わし給え」

最後に、御幣が大音声の掛け声とともに美子の下腹部を祓う。

「喝ーッ！」

びくんつと、美子が跳ね起きる。

神主が一礼して脇へ退くと、祭壇の両側に控えていた童女二人がしずしずと近寄り、左右から手を取って美子を祭壇から下ろした。虚空をぼんやりと見詰め参拜者に正対して立っている美子の前に跪くと、緋袴を脱がせ白衣の前をはだけた。白衣と緋袴の下は素肌だ

った。

美子が自身で白衣の襟先を摘まんで左右に開いた。市杵島姫が宿っている部分は、童女の頭に隠れて参拝者からは（微妙に）見えない。

神主が動いて、美子の足元に三宝を二つ並べた。童女二人が、紅白の紐緒で飾られた毛抜きを美子の下腹部にあてがい、慎重な手つきで一本ずつ引き抜いた。それを小さな美濃紙に包み、封じ目を糊付けして朱印を捺してから御守袋に納めた。三宝の上に十個の御守が並べられると、神主が三宝を取り替える。

次は、美濃紙に三本ずつ包んで、一本のより大きくきらびやかな御守袋に納めた。

童女二人が美子の装束を直す間に、祭壇に合計二十個の御守袋が並べられる。

美子が、拝殿の一面を区切る簾の陰に隠れた。

「御守を求められるお方には千円もしくは三千円の御寄進をお願い申し上げます。額に応じ、一点のみ御守をお渡し致します」

早くも財布を取り出す者がいる。

神主が、もったいをつけて咳払い。

「おひとりずつお祓いをして、依り代たる巫女の霊璽、仏教で言う御本尊、それを拝観していただき、自身の手で内符を抜いていただく秘義も用意しておるが、こちらは三人様限りとして、一万円の御寄進をお願い申し上げます」

一万円といえば、サラリーマンの給料の半月分にもなる。さすがに、財布を取り出した手も止まる。数秒の沈黙が流れて。

「よろしい、私はそっちだ」

サラリーマンふうというよりも重役の風情を漂わせた中年の男が、長財布から一万円札をおもむろに抜き出した。

「俺もだ」

張り合うように、こんな場所でも色鉛筆を耳に挟んでいる若い男も名乗りをあげた。

「では、秘事への御寄進はお二方と承ってよろしいか」  
神主が、参拝者を見回す。

「借用書では駄目でしようか」

返すあてがあるのかと疑ってしまうような、上着にもズボンにも継ぎを当てている初老の男が、駄目元といった口調で尋ねた。

「当社では、やしろ現銀しか御寄進を受け付けておりませぬ。しかしながら……八田金融殿、お出ましくだされ」

拝殿の外扉が開いて、八田勇次と二人の乾分が入ってきた。

「トイチでよければ融通しますよ」

トイチ。十日間で一割の利息という法外な金利である。しかし、ヤクザが仕切る鉄火場ではカラス金、がねカラスが夕方にカアと鳴くたびに一割というポツタクリが横行している。それに比べれば良心的な金利ではあった。



「貸してくれ」

貧相な初老の男だけでなく、さらに二人が手を挙げた。

「いや、三人までと申したはず……」

神主が困惑の表情を作った。

「では、お三方の熱意に敬意を表して、私は遠慮しよう」

重役が、あつさりと降りた。

「俺ア引かねえぜ。四人が定員オーバーてんなら、ジャンケンだ」

鯛の頭を一万円で買おうという男たちだ。売られた勝負を逃げるはずもなく——三回のアイコの後もしつこくグウを出し続けた色鉛筆が敗退した。

勝った三人は脇に待たせて、残る十人への御守の販売（寄進への返礼）は、数分で終わった。ひとり残らず三千円だった。一本と三本なら、有り難みも三倍。先の戦争でも、日本はアメリカの物量に敗北した。その記憶も、三十歳以上には生々しい。

十人が拜殿を退出して、いよいよ淫事が始まる。といつても、美子が公衆便所の裏手でしていたことと、基本は同じである。

祭壇に立った美子を童女ふたりが、今度は素裸まで脱がせる。

さすがに、美子の全身が羞恥で淡いピンク色に染まった。勇次や乾分に見られながらのリハーサルで、平然と振る舞えるようにはなったのだけれど、困った問題も新たに生じた。指一本触れられていないのに、腰の奥がきゆうんとねじられるような感覚が湧いて、粘っこい汗が垂れてくるのだった。

「市杵嶋姫の神様が宿ったって、客はありがたがってくれるだろうよ」

勇次はそんなふうにからかつてから、しみじみと述懐したものだった。

「要は一人前の女になったってことさ。俺もずいぶんと場数を踏んじやあいるが——生娘のまま女にしたのは、おめえが初めてだ」

女にするに二つの意味があるとは気づかない美子だったが、格別の思い入れを持ってく

れているのは、素直に嬉しかった。なんといつても、まったく未知の快感を教えてくださいました男なのだから。

もつとも、あの凄絶な体験を勇次は二度と与えてくれない。

「最初の興業が上首尾にいけば、また弄つてやるよ」

だから、今日は絶対にしくじれない。ぼうつとしていればいいようなものだけど、神憑りの演技なのだ。

美子は祭壇に腰を下ろした。まさか神罰が下つたりしないよねと、ちよつぴり不安なのだが、実のところ、その恐れはないのだった。

そもそも、この神社は稲荷大明神とも市杵嶋姫とも、所縁はない。賭事の神様としても知られる稲荷大明神を担ぎ出し、どうせなら幸運の女神が良いだろうと、八田勇次がでつち上げたのだ。狛犬に替えて稲荷狐の石像を据える凝り様だった。どこぞのガラクタ屋から引つ張ってきたのだが、幾らかは元手が掛かっている。

その縁もゆかりもない神に向かつて、神主が祝詞を唱えながら、御幣で太腿のすぐ上の空間を祓う。その都度に、美子は少しずつ脚を広げていった。

やがて百五十度ほども開脚して、ようやく祝詞が終わった。ストリップ嬢でも、おいそれとはここまで御開帳しない——とは、美子の知らないことだった。しかし、自分の指で広げず他人にも触れさせない（どちらも、神々しくない）となると、こうでもする他はない。

「それでは、お歳の順にひとりずつ拝観なされよ。御神体を頂戴するときのみ、巫女の肌に触れてもよろしい」

最初に借用を申し出た初老の男が、美子の前に跪いた。神主は何も言わない。男はきちんと二礼二拍手一礼をしてから、顔をいつそう近づけて美子の股座を覗き込んでまたぐら。

「おお……」

感に堪えたようにつぶやいて、また柏手かしわでを打った。処女膜を見るのは、これが初めてな

のかもしれない。

単純な算術に基づく推定である。処女を何人も食う男がいるのだから、生涯処女を抱けない男もいる。また、瓜を破る行幸に恵まれたとしても、行為の前に処女膜を確認する者が何人いるだろうか。

感激している男の左右に童女二人が座って、三宝を捧げる。右の三宝には毛抜き、左には御守袋の材料。

男が毛抜きを手に取った。

「それでは、失礼いたしました」

演出に吞まれて、神妙な言葉遣いになっている。左手を遠慮がちに下腹部に這わせて逆撫でし、起き上がった淫毛の一本を抜いた。

美子は、ぴくりとも動かなかつた。神事としての演出。それが『客』を満足させるのだと勇次は言う。御神籤の大凶を引いたから、起工式で神事を執り行なったのに大事故が起

きたからといって、誰が神社を責めるだろうか。

男は淫毛を左の童女が差し出す美濃紙に載せると、二本目を同じ恭しきで抜く。許されているのは三本。三千円の御守と同数だが、あちらが二十五番（二百五十疋）爆弾三発なら、こっちは八十番（八百疋）三発に匹敵する——とは、大勝負で三十倍配当を物した直後に上げた、元艦上爆撃機乗りのこの男の気焰であるが、それはさておき。

三本の淫毛は童女の手で御守袋に封じられて、男に手渡された。神主の手を経ず、清らかな乙女しか手を触れていない。これも細部の演出だった。

男は空になった三宝に千円札を載せた。寄進の一万円とは別口だった。

男が元の座に戻って、二番手はそれなりに身だしなみの整った中年。彼は巫女の股間を覗き見て、おや——という顔をした。彼の知っている処女膜とは様子が違っていたのかも  
しれない。

処女膜の形状が千差万別であることは、現在の読者には自明でしょうが、当時は専門的な医学書か密輸入した（黒塗りされていない）海外のポルノ雑誌くらいしか情報源はなかったのです。

もちろん異議を申し立てたりはせず、中年男は最初の男と同じように、神妙に御守袋を押し頂き、二千元を供えた。同じ御守を持って異なる出目を買うのであれば、寄進の多いほうに神様は味方してくれるだろう。

考えることは誰も同じで、三番手の若者は三千元を張り込んだ。

こうして、初商いは上首尾に終わった。売上は三千元が十個と一万円が三つ。それに拝観料（？）が六千元。ただし、一万円を張り合って退いた二人はサクラなので、彼らが改めて購入した三千元の二個は差し引いて。合計六万円ちようど。

サクラと四人の客引きへの手間賃が千円ずつと、童女へのお小遣いが百円ずつ。小遣いといえは十円玉が相場なのだから、日雇いの日当程度を貰う六人よりも喜びは大きい。

端数は御守袋の材料費や、巫女衣装と狛狐の減価償却に充てる。

残る五万三千円は、神社と八田組が四割ずつ。美子の取り分は二割だが、それでも一万円以上。ひとりでお客を物色したときの二倍半にもなった。

もつとも、サクラも客引きも八田組の者だし、童女まで組員の子供なのだから、いちばん儲かるのが興業主なのは、世間にありふれた図式である。

「大仰な道具立ての割にやあ、時化た稼ぎだな」

勇次はぼやいたが、顔は笑っている。サラリーマンの月給くらいが半日で稼げて乾分にもボーナスをやれたのだから、直系は三十人そこそこの弱小ヤクザのシノギとしては悪くない。なにより、宗教法人が表に立っているから、警察も税務署も怖くなかった。

「毎日二回三回と興業を打ちたいところだが、それじゃ有り難みが薄れるってもんだ。とはいえ、せめて土曜日もやりてえな。開催の間だけでいい、休みは取れないのか」

問われて、美子は即答した。

「はい、だいじょうぶです。有給休暇を取ります」



病気でも身内の不幸でもないのに有給休暇を申請するのには勇気が要るけれど、勇次さんが言うのなら、無断欠勤も厭わない。快感の記憶は美子の裡で一途な恋愛感情へと変化していた。

「よし、いい子だ。たっぷり可愛がつてやるぜ」

狛狐を犬へ戻す力仕事も細々とした後始末も、神社と乾分に任せて、勇次は美子連れ出した。

行き先はありふれた連れ込み宿だったが、壁の一面に張られた鏡のせいで、独身寮の相部屋よりも広く感じられ、布団はずっと豪華だった。

さんざん羞ずかしい部分を見られているとはいえ、勇次と二人きりで一糸まとわぬ素裸になるのは、これが初めてだった。

勇次もパンツひとつになって、一か月前に美子を説得したときよりもずっと長く激しく

美子を爪弾き吹き鳴らした。

——一時間以上も演奏されて、幸せな疲労困憊にたゆたっていると、風呂を勧められた。各部屋に内風呂があるのだという。

勇次が勧めてくれることは、なんであれ否やはない。勇次が甲斐甲斐しく風呂の支度をしてくれる間に、少しずつ人心地を取り戻し（たくなかった）、美子はひとりで湯船に浸かった。

こんな仲になったのだから、もしかすると勇次さんも入ってくるかもしれない。期待しながら待っていたのだが、空振りに終わった。

「やはり美子も女だな。長風呂もいとこだ」

誰のせいだと思ってるんだろうと——でも、初めて名前で呼んでくれたので、機嫌を損ねたりはしなかった。

## 女たちの来訪

五月から七月にかけて、競馬の開催がある週末には、狛犬が稲荷狐にすげ替えられ、女工は巫女に化けた。噂を聞きつけて、客引きをするまでもなく十人以上が参拝に訪れるようになり、希少価値を保つために人数制限をする日さえあった。

美子の取り分は、二か月半で二十万を超えた。女工の年収にも匹敵する。

しかし、良いことばかりではなかった。有給休暇は取らずに流してしまうのが良き社員という風潮の中で、美子への風当たりは強くなっていた。

いっそ、工場を辞めてしまおうかと、勇次に相談したら、きつい口調で叱られた。

「こんな商売、そう長くは続けられねえ。うちだけならともかく、他のやつらもあちこち

で猿真似を始めやがった。派手にやらかしや、いくら宗教法人たって、サツも黙っちゃいねえだろうよ」

今は給料の何倍も稼げていても、そんなのはあぶく銭だ。失うのも、あつという間だ。それはヤクザの考え方だと、美子は内心で反発した。あたしだって馬鹿じゃない。無駄遣いはしないで、大半は貯金している。実家への仕送りを少し増やしたのと、夏向けのワンピースを一着買っただけ。

しかし、勇次の言葉には逆らえない。まして、

「アルバイトだから、いいんだよ。女工という堅気の根っ子を下ろしてるからな」

どんなに清楚な娘でも、水商売には短期間で染まってしまふ。擦れっ枯らしの巫女では、客が寄り付かない。

そこまで言われては、工場での風当たりは我慢するしかなかった。

八月は競馬の開催も無く、美子は手土産を（両親に誂しがられない範囲で）たっぷり携えて帰省した。就職して一年。後輩もできたし、お給料も上がった。嘘はついていない。両親は娘の成長を喜んでくれて。

「民主主義の世の中だ。見合いのなんぞと野暮なことは言わん。けど、彼氏ができたら、きちんと紹介してくれよ」

「お父さんったら、まだ早すぎますよ。でも、そうね。お前には、まだ何も教えてないし。これからも、ちよくちよく帰ってくるんだよ。少しずつでも仕込んであげるから」

両親の愛を嬉しくも困惑しながら、盆休みを過ごしたのだった。

九月になって秋競馬が始まった。

美子の都合を考えて、勇次は神事を日曜日に限った。ただし、午前と午後の二回に増やした。これから勝負に赴く客だけでなく、大勝したカモも素寒貧になったオケラも取り込

もうというのだった。オケラは八田金融の上得意にもなる。トイチで引つ張った金まで博打で溶かした客をどんなふうに追い込むかなんてことまでは、美子の知らない修羅だった。

それよりも。これまでは午後いっぱいを使つて鳴かせてくれたのが、寮の門限（間に合う電車の時間）までの限られた時間になつてしまったことが、美子の不満だった。工場での美子への風当たりを配慮してくれてのことだとは、分かっているけれども。

——その日は、初めて女性の参拝者が訪れた。和服を洒脱に着こなした、三十路前の、凛々しいにさらに一本筋が通つた感じの美人だった。

彼女を案内してきた客引きの畏まった様子と、それを迎えた勇次の苦りきつた顔——を、拝殿の中で巫女装束に身を包んで控えていた美子は、見ていない。

三人限定の秘義には六人が手を挙げた。そのうちには、当の女性も含まれていた。

「女性にょしやうの身でありながら参拝に訪れるとは、それなりの事情があるろう。そなたには男に先んじて寄進をお願い致そう」

勇次の目配せを受けて、神主が宣した。勇次のウインクは美子にも見えていたが、自分への励ましだろうと都合よく解釈して、くすぐったく思っただけだった。

『ご神体』を頂くのも、女性が一番手だった。

礼拝は省略して、いきなり左手で美子の淫毛をまとめて摘まんで撚り集めた。その根元を毛抜きで挟んで——ぐいっと一気に引き抜いた。

(痛いっ……！)

神憑りの演技をしている茫漠とした表情が一瞬引き攣ったが、美子は悲鳴を呑み込んで微動だにしなかった。

「ふん、いい根性してるね。気に入ったよ」

美子にだけ聞こえる小さな声で、女性がつぶやいた。

そこからは、いつもの手順通りに秘義は滞りなく進んだのだが。

「あいつ、何考えてやがんだ」

客のいなくなった拝殿で、勇次がぼやいた。

「あいつは、俺のバシタ（女房）だ。恠気を焼くようなやつじゃねえんだが。後で他のやつから聞いて気を悪くされるなヤだから、先に教えとく」

絶対に女将さんの恠気だと、美子は女心に確信した。男性器と女性器の結合という意味では、勇次と美子は男女の仲ではない。けれど、あんなに激しく女性器を演奏されて、よがり狂わされて——あれが男女の交わりでなければ、何だというのだろう。

翌週には、別の女性ふたりが神社を訪れた。暗合といえはそうだが、必然でもあった。訪問者は美子と同期入社の上梓紗と熊野佳子だった。週末ごとに仲良しグループとは別行動を取るのだから、不審を抱かれるのも当然だった。美子が、適当な嘘をでっち上げるのが心苦しく、曖昧に言葉を濁していたのもよくない。二人は、こっそりと美子を尾行して——神社に辿り着いたのだった。

警察の内偵を意識して、また他の組の妨害なども予想して、客引きが不要になった以上



の人数を見張に使っているのだから、二人が見つからないはずもなかった。二人は正直に、神坂美子の同僚だと説明したので、至極丁寧に——勇次と美子の前に引き据えられた。

「せっかく来てくれたんだ。美子がどんなアルバイトをしているか、見学させてあげよう。よければ、きみたちにも手伝ってもらいたい」

神事には時間があるからと、勇次は『記念写真』を提案した。美子が着ているのと予備とを合わせて二着の巫女衣装を三人で交代に着替えさせ、神主と一緒に勇次まで写真に収まった。堅気とは明らかに異なる雰囲気を漂わす勇次と、彼の言いなりに動く美子とに気圧されて（ばかりでなく、好奇心も手伝って）、二人の少女は現代風にいえばコスプレ写真を何枚も撮られたのだった。

神事は、巫女見習という名目で見学させた。参拝客の後ろで、案内役の男をひとりずつ付き添わせた——のは、うろたえ騒がれてはぶち壊しになるからだだった。

ふたりとも、騒ぐどころではなかった。顔を真っ赤にして、しかし食い入るように秘義

まで目撃して。

「私たちには、とても無理です」

口をそろえてアルバイトは辞退した。

勇次は無理強いしなかった。見ず知らずの男に淫毛を買ってもらおうと考えること自体、既存の道徳や幼時から植え付けられてきた羞恥心を克服しなければ出てこない発想だった。それを実行に移すには、蛮勇ともいえる覚悟が必要だ。美子のような娘が、そうそう居るはずもないと、勇次は理解しているのだった。

「無理には言わねえ。だが、こいつの悪い噂が広まったときやあ、おめえら二人が震源地と考えるぜ。それまでは、今日の記念写真は誰にも見せねえから、安心しな」

同じ巫女装束を着て美子と並んでいれば、同じアルバイトをしていたと思われるだろう。

勇次は二人に口止めをしたのだった。

「今日は何時間も付き合ってもらって悪かったな。こいつは、ほんの御礼だ」

見ている目の前で封筒に千円札を五枚ずつ入れて、二人に押しつけた。二人は素直に（と  
いうよりも、勇次の押し出しに圧倒されて）封筒を受け取った。

「最後まで引き留めて、おめえが盛大に歌う様も見せてやりや、案外と気が変わったかな」  
乾分に送られて神社を去る二人の後姿を見ながら、勇次が美子をからかった。その戯言  
に、美子は胸を騒がせる。あの二人のことではない。勇次には奥さんがいて、自分もいて  
……それで終わりと考えるほうが不自然だと、ようやく思い至ったのだ。

それでもかまわないと、美子は諦めた。きつと、勇次さんは懐が広いんだ。女の人を何  
人も抱え込んで、余裕綽々なんだろう。

でも……と、美子は自惚れる。拳骨の間から指を突き出すあれがどういう意味か、なん  
となく分かる。きつと、奥さんにも他の女の人にも、あれをしているんだ。でも、あたし  
にはしない。特別扱いなんだ。自惚れながらも……いつかはあれを体験するんだったら、  
相手は絶対に勇次さんだと、それだけは心に誓う美子だった。

しかし、初恋が実らないのは世の常だった。

### 見せしめの碟

秋競馬も終盤を迎える頃、美子の貯金額は五十万円に達していた。サラリーマンの年収を軽く超えている。安い物件なら、ほんとうに小さな花屋を開けるくらいだが——夢として勇次に語ったら、猛反対された。裏通りに小さな花屋を開いても、客が見つからない。運転資金を食い潰して、すぐに立ち行かなくなる。

「まあ、別の花を売ろうってんなら、話は別だが。おめえなら店主よりも売り子のほうが稼げるぜ。巫女との兼業は無理だがな」

言いながら勇次がいつもより下の部分、穴の入り口をくすぐったので、『別の花』の意味

は分かった。そんなこと、絶対に嫌だった。美子が売っているのは、毛だけだ。彼女にしてみれば、後世のギャルが使用済みパンツを売ると同じ感覚だったのかもしれない。

なにも急がなくていい。秋競馬が終わったら、すぐに年末競馬、新春競馬が始まる。半年で五十万円だから、一年で百万円。二年で二百万円。目抜き通りに大きなお店を構えることも不可能じゃない。それとも、自分は資格を持っていないけれど、人を雇って美容院を開くのも素敵だ。

でも——と、美子は悩む。お店を持ったら、それが勇次さんとの訣れになる。そんな予感がしていた。

佳子は夏に先輩の男性と海へ行つて、そこで結ばれたと自慢している。でも、話を聴く限りでは痛かっただけで、女性器にはキスさえされなかったそうだ。勇次の乾分たちともいくらかは話をするようになったのだけど、『ハモニカ』は勇次の特技で、キスはともかくビブラートなんて、誰にも真似はできないそうだ。

それを考えると、お店なんかどうでもよくなってくる。元々、小学生が抱く漠然とした夢と違いはなかったのだから。

——その日も、一日二回の興業で二万五千円を稼いで、連れ込み宿で何度も絶頂まで演奏されて、雲の上を歩くみたいな感覚は、電車を降りてからも続いていた。

まだ火照りの残る肌を晩秋の夜風に吹かれながら、駅前町を出て工場の寮へと田圃に挟まれた道を歩く。後ろから車のヘッドライトが近づいて来たので、畦道へ避けた。

荷台に幌を掛けたトラックがゆっくりと美子を追い越して——急停止した。

荷台から二つの人影が飛び下りた。ひとりが美子の前に立ちはだかつて、顔を懐中電灯で照らした。

「きゃっ……?!」

「間違いない。こいつだ」

声と同時に背後から抱き着かれて、口をふさがれた。

「むうう……!!」

前に立っていた男が身を屈めて美子の脚をつかみ、二人掛りで荷台に押し込んだ。二つの人影も荷台に飛び乗ると、トラックは急発進した。

「何をするんですか！」

美子は恐怖に震えながらも、気丈に相手を詰った。返事は、手酷いビンタだった。

「おとなしくしてりゃ、命までは取らねえ。だが、二度と商売は……」

「余計なことはしやべるな」

訳が分からないままに、美子は身の危険を感じた。女性にだけ生じる危険だ。

トラックから飛び降りようかと後ろを振り返ったが、大怪我をしそうだと諦めた。だいち、幌が開いている荷台の後ろまでも辿り着けそうにない。

美子は運転席側へ逃げて、荷台の隅に縮こまった。男たちは逃がさないように見張ってはいるが、すぐに襲い掛かってくる気配もなかった。

トラックは山道へ折れて、数百メートルほど進んで止まった。

美子は荷台から引きずり下ろされて、運転台にいた二人の男と合わせて四人に取り囲まれた。

「お金なら……全部あげます。誰にも言いませんから、ひどいことはしないでください」  
哀願はしてみたが、無駄だと悟っていた。わざわざ待ち伏せして、顔を確認したうえで誘拐したのだ。行きずりの強姦魔なんかじゃない。でも、何が目的なのか、それが分からなかった。男の一人が「二度と商売は……」と言ったことも、恐怖で空回りしている頭ではヒントにすらならなかった。

「どうせだ。引ん剥いちまおうぜ」

背後から羽交い絞めにされた。正面に立った男が美子のスカートを乱暴にずり下げた。ホックが弾け飛ぶ。パンティは引き千切られた。

「じっとしてろよ。動いたら殴るぞ」



羽交い絞めから解放されると、美子は草むらに崩折れた。膝が震えて立ってられない。

男の一人が肩に手を掛けて上体を引き起こす。別の一人がセーターの裾をつかんで、ブラウスごと頭から引き抜いた。スリップは肩紐を千切って下へ落とし、ブラジャーも筆り取った。一分もしないうちに、美子は靴下だけの全裸にされてしまった。

腕をつかまれ引きずられて、トラックの正面へ連れて行かれた。処女の裸身がヘッドライトのビームに照らし出される。

「まずは売り物だな」

草むらに押し倒されて。いよいよ犯されるんだと、悲しく覚悟を決めたのだが。様子が違っていた。男たちは二人掛りで美子の両手両足を押さえつけて、三人目が横に片膝を突いた。

四人目の男からガムテープを受け取ると、それを長く引き伸ばして、美子の下腹部に掌でぎゅうぎゅう押しつけてから。

ベリリリリッ……一気に引き剥がした。

「いやあああっ……痛いつ！」

ヘッドライトに照らされたガムテープには、淫毛がびっしり貼り付いていた。

「あっ……?!」

美子は、男たちの目的を悟った——と思った。

「乱暴はしないでください。御守が欲しいのでしたら、何本でもあげます」

トラックの荷台に放り込まれた直後の問いへと同じ答えが返ってきた。ただし、今度は頬へではなく乳房へだった。

バチイン!

「あうっ……」

まだ少女の面影を色濃く残しているささやかな乳房は、真横からはたくには小さすぎた。

斜め上から掌を叩きつけられて、美子は息が詰まった。

「当たり前もしない御守なんぞ、誰がいるかよ。インチキ商売ができねえように、懲らしめてやる」

再びガムテープが下腹部に圧着されて、乱暴に引き剥がされた。三度四度と繰り返される。そのたびに美子は、小さな悲鳴をあげた。怯えきっていて、大声にならない。

下腹部が丸坊主になり、毛根を引き抜かれた出血で薄赤く染まった。それでも『懲らしめ』は終わらない。大きく開脚させられて、蟻の戸渡までガムテープに食い荒らされた。

「さて、これで手間仕事は終わったな」

男の言葉に、犯されずに赦してもらえるのかと、美子は安堵しかけた。もちろん、それも勘違いだった。

「いよいよ、お楽しみ時間だ」

そう言った男がズボンを下ろしにかかった。

「……!!」

美子は跳ね起きて、逃げようとした。が、別の男に立ちはだかれてしまった。

「素っ裸で、どこへ行くこうってんだ」

男は薄ら嗤いを浮かべて、美子を押し倒した。

「暴れられちゃ面倒だ。押さえとけ」

下半身を剥き出しにした男の指示で、美子は両手をバンザイの形に押さえつけられた。

男の股間には、凶々しい肉棒が屹立している。

「ひっ……?!」

これまで数えきれないほど何度も勇次に肉体を演奏されてきたが、全裸になるのは美子だけで、勇次は一度もパンツを脱いだことがなかった。はち切れそうになったテントから想像はしていたが、初めて目にする怒張は美子を恐怖に陥れた。

(あんな大きな物……)

指一本がやっとの穴に入るわけがない。

男が、美子の足を蹴って開かせた。これまでに振るわれた暴力に萎縮して、美子は抗えなかった。男は美子の脚の間に膝を突くと、両肩に担ぎ上げた。美子の腰が宙に浮いた。すぐ目の前に男の顔が迫る。男が顔をうつむけて——美子は、股間に生暖かい異物が押しつけられるのを感じた。割れ目の奥を強く圧迫された直後、鋭い痛みがそこを引き裂いた。

「きひいいいっ……！」

美子は全身を硬直させた。筋肉の緊縮が、いつそこの激痛をもたらす。

「いやああっ！ 痛い、痛い……！」

男は美子の訴えに構わず、むしろ興奮をあおられたかのように、腰を衝き動かし始めた。豊満には程遠い乳房がプリンか何かのように揺れるほど、美子の白い裸身が上下に激しく動く。

「ひいい、痛い、やめて……いやああ！」

股間を挟られる激痛に、美子の悲鳴も揺れ続ける。

元より、男には処女へのいたわりなど無い。いや、「懲らしめてやる」と言っていたように——おのれの欲望を満足させる以上に荒々しく抽挿を繰り返している。娼売女なら、男を突き退けるか男にしがみつくかのどちらかだったろう。

処女に耐えられる行為ではなかった。しかし、身動きすらろくにできない少女は、強制的に耐えさせられるのだった。それも、この男だけでなく、この場にいる四人の暴漢全員が少女を穢し尽くすまで。

最初の男が立ち上がると次の男が、投げ出された美子の脚の間に割り込んできたが——すぐには犯しにかからなかった。

「うへ……ぐちゃぐちゃじゃねえかよ」

股間は破瓜の出血で赤く染まり、男の吐き出した白濁が混じっている。ガムテープに叢を筆り取られた下腹部にも血がこびりついている。

二番手の男があたりを見回し、手を伸ばして、美子から剥ぎ取った下着を拾い上げた。それを使って雑に汚れを拭き取り、さらに——下着を丸めて淫裂にねじ挿れた。

「きひい……」

呆然と、男の為すがままにされていた美子が、弱々しい悲鳴を上げた。腰を突き上げるような動きをしたが、それだけだった。逃れようとして身体を動かせば動かすほど、男は乱暴になり痛みは強くなる。おとなしく廻られていることだけが、今の美子にできる自衛の手段だった。

美子の股間を（使用に堪える程度に）綺麗にすると、二番手の男も最初の男と同じ流儀で美子を犯した。

美子は、もう悲鳴をあげなかった。涙を流しながら、覆いかぶさった男の顔を突き抜けて虚空に視線をさまよわせている。

「ひっ、ひっ、ひっ……」

泣きじやくくっているのか、下腹部を突き上げられて息がこぼれているのか。

三番手の男は、いつそうの暴辱を美子に強いた。露出した下半身に元気がなかったのだ。

「おまえな。こんなのは修羅場でもなんでもないぞ。金玉縮み上がらせて、どうするんだ」

最初に美子を犯した男が押搦した。こいつがリーダーらしい。

「くそ……おら、しゃぶれよ」

美子の髪をつかんで上体を引き起こし、萎えた逸物を唇に押しつけた。

「んむむ……」

女が男の物を咥えたりしゃぶったりすることもあるとは——勇次の乾分たちの猥談を小耳に挟んで聞きかじっていたが、そんなのは淫乱な擦れっ枯らしのすることだと思っていた。それはもちろん、勇次さんにはハモニカを吹いてもらってるのだから、お返しに尺八を吹いてあげてもいいかなと夢想したこともあるけれど。まさか、強姦者にそれを強いられるとは、この瞬間までちらりとも頭に浮かばなかった。



初めてを勇次さんにしてもらうことは叶わなくなったけど……ハモニカのお返しだけはしてあげたい。美子は、髪の毛が抜けそうな痛みをこらえて顔をそむけた。

「てめえ……この阿婆擦れが」

男は毒づいて、美子の腹を殴りつけた。

「ぐえ……」

呻いて半開きになった口に、でろんとした棒蒟蒻が押し込まれた。蒟蒻とは違って、獣じみた臭いが鼻の奥へ突き抜けた。

「んぐううう……!」

男は両手で美子の頭を抱え込んで、前後に激しく揺すぶった。

「噛むんじゃねえぞ。歯をへし折るからな」

言われるまでもなく、そんな気力は無かった。

棒蒟蒻は上顎をこすり舌を蹂躪するうちに、次第に硬く太く長くなって、喉奥まで突き

始めた。

「んぶ……むぶうう……」

どんつと肩を突かれて、再び美子はお向けに転がった。

男が体勢を立て直して、のしかかってくる……。

——四人目の男は最後まで美子の口を使って、顔一面に白濁をなすりつけた。そんなことをされても、美子は壊れたマネキン人形のように手足をばらばらに投げ出して、ぴくりとも動かなかった。

男どもの『懲らしめ』は、まだ終わったのではなかった。美子は、トラックの荷台に放り込まれた。トラックが来た道を引き返し始める。駅の手前で幹線道路へ折れて鉄道と平行に走って、神社に乗り入れた。

「罰当たりなことをしてるようで、どうにも気が引けるな」

「馬鹿野郎。インチキ神社にバチも太鼓もあるかよ」

ふざけたことを言い合いながら、鳥居の貫（下側の横木）から二本の縄を垂らした。まだ放心している美子を連れてきて、左右の手首に縄を巻きつけて。

「せえのお」

美子を鳥居に吊るした。

「いやあ……もう、虐めないでください」

半分は正気を取り戻して、美子が訴えた。

「静かにしてろや」

目の高さに来ている股間に、リーダー格の男が懐中電灯を突っ込んだ。

「ぎひい……」

逸物より太い異物を挿入されて、しかし美子の悲鳴は控えめだった。叫ぶ気力などまったく失せているせいだが、それだけ拡張されてしまったせいでもあった。

男は懐中電灯を抜き取って。美子に一層の屈辱を与えた。両脚にも縄を巻いて左右の柱

とつなぎ、開脚を強いたのだった。

鳥居の中に大の字磔にされて。次はどんな酷い目に遭わされるのかと怯えていた美子だったが——『懲らしめ』は、そこまでだった。男たちは大ハンマーやらバールやらをトラツクから持ち出して、境内へと向かった。

バガアン！

メキメキ！

ドオン！ ドオン！

派手な音が聞こえてきた。神社を打ち壊しているのだろう。

「何をしている！」

「やめ……うわあっ！」

怒号と悲鳴が湧いて、それはすぐに立ち消えた。元々は荒れ果てていて、四十になろうというのに嫁の来手もない貧乏神主が独りで守って（というよりも住み着いて）いた神社

である。羽振りが良くなったとはいえ、何人もが夜番をしているはずもない。しかも、四人は荒事に慣れた連中だ。たちまち制圧されてしまったのだろう。

その気になれば、あらためて解体の必要もないまでに本殿も拝殿も破壊できていただろうが、目立つ造作物を壊しただけで、男たちは引き揚げて行った。美子は鳥居へ空中礫に、神主と禰宜は宿舎の中で背中合わせに縛られたまま放置された。

——美子を最初に発見したのは、深夜の物音が気になって、夜明けとともに様子を見に来た近隣の住民だった。

その老人は美子に駆け寄って、自分だけでは助け下ろせそうにないと見て取ると、応援を呼びに行った。しかし——

「動かしちやいけない。警察を呼べ。証拠保全というやつだ」

などと言ひ出す者がいて、実にもつともな言ひ分に他の者も従った。その男は、警察が来る前に姿を消していたのだが。

警察への伝え方が悪かったのか、火事も人死にも無いと軽視されたのか。駐在が来るまでに一時間、パトカーが到着したのは、さらに三十分後だった。それまでの長時間、集まった野次馬の視線に美子は曝され続けた。さすがに、誰かが腰のまわりにシーツを巻いてくれているが。

すでに意識を完全に取り戻していたが、美子は気絶したふりを続けた。何十人もの見知らぬ人たちに裸身を曝すだけでも、耐え難い恥辱だった。腰のまわりを隠されていても、暴行で流れた血が踝まで伝っている。口のまわりにまで白濁がこびりついている。そういった一切を知らずに気絶しているより他に、身の処し方はなかった。

警官が証拠写真を撮影してから、ようやく美子は磔から下ろされて、直前に到着していた救急車に乗せられた。

「俺は、この娘の知り合いだ」

パトカーにわずか遅れて駆けつけていた勇次が、強引に救急車に乗り込んで来る。勇次

の顔を見た途端、美子は安堵のあまり、再び意識を失った。

## 堅気との訣別

病院に運ばれて外傷の手当てを受けて、美子は警察から事情聴取されたのだが。見知らぬ暴漢に拉致されて犯され、神社で磔にされたという事実だけを話した。神社との関係も御守のことも、一切口にしなかった。勇次の入れ知恵だった。そして警察も、およそのことは察しているだろうに、根掘り葉掘りはしなかった。

「ヤクザ同士の争いだ。ちゃんとケジメはつける」

救急車の中で美子に言ったと同じ事を、勇次は警察にも啖呵を切ったのだろう。

病院も会社も、ヤクザ同士の抗争には巻き込まれたくない。だから、美子を入院させようとはしなかったし、工場からも見舞いは来なかった。疾風迅雷に勇次が美子を連れ去つ



たせいもあっただろうが。

八田組の事務所には何度か顔を出したことがある美子だったが、勇次の私宅に上がるのは初めてだった。玄關口に出迎えた姐さん——勇次の奥さんは、神社に訪れたときとは打って変わって、秋物のセーターにタイトなショーツスカートという装いだだった。凛々しさよりは艶やかさがにじみ出ている。強姦され見世物にまでされたショックから立ち直っていない美子だったが、彼女を見た瞬間に（負けた）と思ってしまった。

元から、姐さんと張り合うつもりなどなかった。美子の意識の中で、彼女は「姐さん」であって「正妻」ではなかった。

それは姐御も同じだったろう。夫のシノギのいざごさに巻き込まれた被害者として、美子に接してくれた。しかし同時に、女心の機微にも通じていた。

「うち、事務所で帳簿の始末をしてきます。夕方まで帰って来れませんから、お昼は店屋物で間に合わせてくださいね」

家の中に夫と若い女の二人きりにしても平気なようであった。どころか。

「いつも通りに、お風呂は朝から沸かしてあります」

二人で入れとそそのかしたりはしなかったものの。

勇次と二人きりで、座卓を挟んで向かい合つて、三十分。勇次は、一言もしゃべらない。

美子も、うつむいて黙りこくっている。出された茶は、とつくに冷めている。

静かに時間の流れる中で、美子は——強姦を事実として受け容れざるを得ないと自分を納得させて、その一方で、それを絶対に否定したい感情が募っていく。そのせめぎ合いが頂点に達した……。

「ごめんなさいっ!!」

美子は座卓に突つ伏した。わあああつと、強姦されていたときでさえ出さなかった大声で、手放して泣き始めた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

どうした——などと尋ねず。勇次は美子の後ろへまわって、黙って肩を抱き背中を撫でてやる。

その手の動きに、思いの丈が吐き出される。

「ごめんなさい……あたし、穢されてしまった」

淫毛の商品価値がなくなってしまったことを詫びているのではなかった。

「初めては勇次さんにと決めていたのに……ごめんなさい！」

勇次はきな臭い顔で美子の慟哭を聞いていたが。

美子の手をつかんで立ち上がった。

「来な。俺が綺麗にしてやるよ」

美子を引きずって、風呂場へ連れて行く。

「自分で脱げるか？」

美子は何も考えずに、こくんとうなずいた。勇次にもらって病院で着替えた服を、ゆっ

くりと脱いでいく。

(あ、これって……)

早朝に店が開いているはずもない。これは、姐さんの服だ。すこしぶかぶかだけど、姐さんにはびったりだ。他の組員の家族の物とは、考えたくなかった。

股間に当てられたガーゼは勇次が剥がしてくれて。美子は肩を抱かれて風呂場へ足を踏み入れた。勇次も、美子が脱ぐ間に手早く素裸になっている。

股間の逸物がうなだれているを見て、美子は悲しみを募らせた。彼女の前でパンツ一枚になるとき、そこがテントを張っていなかったことなど一度もなかったのに。

「ここまで悄気てられちゃあ、俺もうなだれちまうぜ」

出来たばかりの傷口を抉られて、美子は死にたくなかった——のだが。

洗い椅子に腰掛けさせられる。

勇次は洗面器に湯を汲むと石鹼を浸して、手を洗っているのか石鹼を洗っているのか分

からない仕種で、盛大に泡を立てた。

「見様見真似でも、なんとかなるもんだな」

そんなことをつぶやきながら、勇次は泡を掌いっぱいに掬って——美子の乳房をつかんだ。揉み洗いという言葉がしっくりするほどに強く、乳房を揉み立てる。いつもの繊細な指使いとは、まるで違っていた。

(痛い……) という言葉を、美子は呑み込んだ。乳房をこねられることに、暴姦どもに蹂躪された痕跡が消え落ちていく。そんなふうには、美子は思った。

乳房に続いて腕から背中。乳房と同じように、強く丹念に。そして腰から……

「ちと沁みるかな。痛かったら言えよ」

淫唇を摘まんで二本の指を逆方向へ滑らせる。

(痛うっ……)

声には出さなかった。心地好い痛みだった。暴漢どもの仕打ちに比べれば愛撫でさえあ

る——癒しの痛みだった。

そうして初めて、勇次の指で女の中芯を穿たれて。

「あつ……くうらん」

痛みを訴える呻きが、甘く鼻に抜けた。穢されたところが、勇次の指で清められた。そんな想いが頭を痺れさせた。と同時に——もっと太い肉体で清めてほしいと痛切に願った。

しかし勇次は、美子の期待通りにはしてくれなかった。

「ここは、石鹼でわけにやいかねえからな」

耳元にささやかかれて、はっと顔を上げると、横ざまから勇次が覗き込んでいた。そのま  
ま唇を重ねられた。

(汚いっ……)

とっさに思ったのは、それだった。

これまでに数えきれないほど、キスはしてもらっている。舌を絡め合ったり、歯と歯茎

を舐められたり、上顎をくすぐられたり、頬を内側からつつかれたり。でも今の美子の唇は、どこの誰とも知れぬ男の性器を突っ込まれしゃぶらされて穢れている。それを承知の上で、勇次さんは唇を合わせてくれている。

美子は身体をひねって勇次に抱きついた。いや、しがみついた。癒しと安らぎの時間が流れる。

勇次が顔を離して耳元にささやいた。

「おまえの初めてをもらうぜ」

「え……？ ひゃあつ」

疑問は、小さな悲鳴とともに氷解した。肛門をつつかれたのだ。そんなことが可能だとは、たった今まで考えたこともなかったが、さわられてみると自然に了解できた。勇次さんに捧げられるところが残っていて、ほんとうに嬉しい。

勇次が脱衣場から何枚もバスタオルを持ってきてタイルの床に重ねた。

言われるままに、美子はその上に仰臥した。両脚を高々と持ち上げられ、膝を肩に担がれた。それは、処女を奪われたときと同じ形だった。

勇次にしてみれば、できるだけ正常位に近い形にしてやりたかったのだろう。経験が皆無に等しい美子には、そんな気遣いまでは分かるはずもなかったが——恥辱の記憶が、そのまま至福のそれに塗り替えられていく想いだった。

大輪の花よりも色濃い小さな蕾を、石鹼水を掬った勇次の指が揉みほぐす。敏感な一点に触れられるのとは異なる、淡く切ないが奥行きのある快感がじんわりと腰に浸透していく。

「よし、挿れるぞ。力を抜いて、ゆっくり深呼吸しな」

すうう、はああああ……肛門に硬い温もりが押しつけられた。

すうう、はああああ……肛門が圧迫されたと感じた直後、ずぐうつと貫かれた。

「んぐっ……」



美子は呻いて息を詰まらせた。みしみし軋むような鈍痛が肛門を引き裂くのだが、それが嬉しかった。

肛門で交わるなど、男女の正常な営みではないと、それくらいは美子にも分かる。処女膜を傷つけないにもかかわらず、これまではしてくれなかった。それほどに特別の事なのだ。姐さんに勝ったなんて自惚れはしないけれど……勇次さんに何人も女がいたとしても、自分のような小娘でも、その人たちと張り合えるくらいにはなつたんじゃないだろうか。勇次が腰を動かし始めて鈍痛が脈打つと、美子はますます幸せを噛み締めるのだった。もつとも——事前の準備（五日後に二度目を経験したときに腸洗滌を知った）をせず事に及んだ跡始末には、百年の恋も冷める思いだったが、それはともかく。

美子の運命の流転は、まだ始まったばかりである。

帰宅した姐御と、あらためて竿姉妹の契りを結んだこと（俗にいう鶯の谷渡り）。神社で

の事件が噂になって、工場を辞めざるを得なくなったこと。特飲街の片隅に、勇次の手配りで小さな花屋を持たせてもらって、以後十年にわたり売り子としてもナンバーワンを張り続けたこと。それらはすべて、夜の世界に棲む女にとっては、ありふれた物語であろう。

四人の襲撃者が属する組に八田組がきっちりオトシマエを着けたことなどは些末事である。

ただ——美子が勇次の正妻とは終生、心身ともに友好関係を保ち、戸籍上は独身を貫いたが孫に囲まれて令和の時代を迎えた事実だけは付言しておきたい。

淫毛の御守…完